
夢色彩のカーバンクル

倉元裕紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢色彩のカーバンクル

【Nコード】

N6452Y

【作者名】

倉元裕紀

【あらすじ】

前世の記憶。それは夢を通して伝えられる、過去の自分からの贈り物。世代を超えて伝えられる、忠告、運命、そして思い出。世界中の人々が必ず見るその記憶を、レオンはなぜか見られずにいた。そこで彼は冒険者になることを決意する。自分の魂を象る遺産、その場所を示すと言われている導きの妖精、カーバンクルに出会うために。世代を重ねる人間たちと、不死の存在であるカーバンクルが共存する世界。その中で成長していくレオンの物語。

雪解けの道

まだ雪が残っているからなのか、荷馬車越しに伝わってくる振動も控えめだ。まるで今日の日の僕の為に、雪を残しておいてくれたみたいに。春が雪解けを先延ばしにしてくれていたのだろうか。

きつと、明日からは本格的な春。

自然と顔が綻ぶ。

もつとも、村を出る時から、ずっと緩みっぱなしだったけれど。澄んだ心地いい空気。

何かの果物を干した物だろうか。甘い匂いが漂ってくる。

何より、抑えきれない期待。

レオンは馬車の外に目を向ける。

抜けるような青空。雲一つない、まさに快晴。

本当にいい日だ。

神様と、そしてイブ様に感謝しないと。

「おい。坊主」

荷馬車の御者の声。まだ若い男性だ。たまに村までやってくる行商の人らしい。今日までほとんど面識はなかったが、レオンの旅立ちの事を聞いて、ついでだからいいよと快く馬車に乗せてくれた、優しい人だ。

レオンは馬車の中から顔だけ出して聞いた。

「何ですか？」

御者の男性は、手綱を握ったまま、ちらりとだけこちらを見る。

口元が少しあがっていた。

「見えるだろ？」

彼の言葉の意味がすぐには飲み込めなかった。だけど、彼と同じように前を向いてみると、すぐに分かった。

山を下りた先。まだ遠いその先には、見渡す限りの平原が広がっている。

そして、その広大な土地にぼつりと、だが確かに町が見えた。
自治都市ユースアイ。

「うわぁ・・・！」

目を輝かせるレオンを見て、御者は少し苦笑したようだ。

「ちっさい町だよなぁ」

「小さいんですか？」

きょとした顔で聞くと、今度は声を出して笑われた。それがどうしてなのか分からなかったので、レオンはますます首を捻った。
「小さい小さい。まだ出来て400年くらいだし、それに、交通の要所ってわけでもないから、あんまり大きくならないんだよなぁ」
「へえ・・・」

「でも、住んでるのはいい奴ばかりだから、坊主みたいな田舎者にはちょうどいいな。せいぜい腕を磨いて、名のある冒険者になってくれよ。出来たら、サイレントコールドくらいの」

レオンは照れて頭を掻く。

「いや、そこまでは、ちよつと・・・」

「そうか？じゃあ、俺のお得意様になつてくれればいいや」

男はそこでまた笑った。やっぱり理由は分からなかったが、レオンもつられて笑った。

ひとしきり笑ったところで、御者がまた一瞬だけこちらを見た。

「というか、坊主。お前、ジーニアス？」

ジーニアスとは魔法が使える冒険者の総称だ。つまり、彼の質問の意味は、貴方は魔法が使えますかという事である。

「いえ、魔法は全然」

「でも、サイレントコールドの故郷だよな？お前の村」

「あ、はい。でも、僕は全く才能がないみたいで。一応調べて貰おうと思っているんですけど、たぶん魔法はダメですね。だから、アスリート志望で頑張ってみようかと」

アスリートとはジーニアスの反対。つまり魔法が使えない冒険者の事。冒険者を大別すると、このどちらかになる。アスリートの方は、剣とか弓とか、体力勝負の冒険者が多い。

「それは苦勞しそうだな。お前はあんまり身体が大きくないし……っというか、明らかに弱そうだな。俺の方が強いんじゃないか？」

酷い言われようだが、まったく異論はなかった。レオン自身も、それは自覚している。

実際、レオンは村の中でも、あまり腕っ節が強いとは言えなかった。身長は普通くらい。身体もあまり逞しいとは言えない。幼い頃は、よく女の子と間違えられたほどで、きっと、母親に似たのだろうとよく言われる。黒い髪と濃い瞳はまさに母親ゆずりである。だが、母親には魔法の才能が少しだけあったのに、それはレオンにはさっぱり遺伝しなかった。

多少残念ではあるが、レオンはあまり気にしていない。父親も母親も、レオンの旅立ちを応援してくれた。優しい両親だから、それだけで十分だ。

レオンは苦笑しながら言った。

「そうですね。一応はいろいろ訓練してみたんですけど」

「なんかさ。一年くらいたったなら、あそこの雑貨屋か何かで働いてる気がする」

「そんな事は……ないとは言切れないですね」

もしダンジョンで大怪我でもしたら、そうなっているかもしれない。い。

その返答に、御者の男は少し口元をあげる。

「謙虚だねえ。まあ、身体が小さいアスリートでも、伝説になった奴はいるんだ。スニークとかはいい例だよな。お前も大方、その辺りを目指してるんだろ？」

その質問はレオンには答えにくいものだった。

普通はそこで、はいとかいいえとか、はっきり答えられるのだ。

冒険者を志す人達は、みんな確固たる目標というか、指針がある。サイレントワールドとかスニークというのは、冒険者として伝説になった人達に与えられた称号で、今を生きる冒険者達の目標でもある。だが、彼らの名前には、それ以上の意味もある。

仕方なく、レオンは正直に答える事にした。

「いえ、その・・・なんていうか、僕は分からないんです」
「へ？」

男が驚いた表情でこちらを見る。予想していた通りの反応だった。そんなに驚かせて申し訳ないという気持ちだが、レオンの心の中で急速に膨らんだ。

若干焦りながらも、慎重に言葉を選んで説明する。

「そのですね・・・実は全く前世の記憶がないんです。イブ様どころか、夢自体も全く見た事がなくて。だから、冒険者になったら分かるんじゃないかと思って、決心したんです。もし一人前の冒険者になれば、アーツを手に入れられたら、前世が分かるんじゃないかって」

これで分かって貰えるだろうかと不安になりながら、レオンは御者の男の顔を見つめる。

その男は目を見開いたまま固まっていた。彼のこんな顔を見るのは初めてだ。村を経ってからまだ一日半ほどの付き合いだが、いつも気さくで余裕のある男。まだ若く見えるが、自分よりは明らかに年上だし、自分が彼の年齢になった時、彼くらい落ち着きある大人になれているとは思えない。そんな男が、思考停止するほどの事実なのだ。頭では分かっているものの、目の当たりにしてみると、自分でも意外なくらいだった。

「・・・やっぱり変ですか？」

おずおずと聞くと、男はやっと我に返ったようだった。

「あ、いや・・・まあ、そうだな。少なくとも、そんな奴は初めて聞いた」

「初めてですか？やっぱり珍しいんですかね」

「珍しいっていうか・・・そんな奴がいるとは思わなかった」

レオンはそこで、かねてからの懸念を相談してみる事にした。

「これ・・・ギルドに話しても、受け入れて貰えると思いますか？」

男は難しい顔をしながら前を向いた。

レオンにしてみれば、前世が見えないというのが、冒険者を志す最大の動機でもあり、また、最大の懸念でもあった。自分には見えないその前世というものを、多くの冒険者は自分の指針にする。前世が剣士ならば剣士の道を、魔術師なら魔術師の道を志すものなのだ。それが最も自分に適した道で、何より、前世の記憶がその楽しさを教えてくれる。

その指針がない自分は、いわば真つ暗闇にいる状態。これがどれくらいのハンデなのか、自分では分からないのだが、不安は不安だった。

黙ったまましばらく考えていたが、やがて唐突に口を開いた。

「俺さ。今は見ての通りの商売人だけど、夢の中では料理人なんだよ」

突然の話題に、レオンは反応が出来なかった。

「料理人っていつても、俺に見えるのは見習いの時の記憶だけなんだけどさ。しかも、そんなに大きくないレストランなんだ。だから、まあ、そんなに腕がいいわけじゃなかったんだろうな。だけど、料理に魅せられているのは、もの凄く伝わってくるわけ。見習いだから、自分の好きな料理なんか作らせて貰えないだけどさ。でも、それでも楽しかったんだ。食材を前にした時の高揚感だけは変わらない。今だって、料理人じゃないけど、料理は好きなんだ。昨日の煮込み料理も旨かっただろ？」

レオンは頷く。確かに素人の料理ではなかったが、行商だから料理も自然に身についたのだろうと思いきんでいた。

「そんな俺でも、今は料理人じゃなくて行商をやってる。もちろん、食材をみる時には役に立つ事もあるけど、せいぜいそんな程度。だから、まあ、前世なんてその程度だと思えばいいんじゃないか？ギ

ルドの方も、まあ困るかもしれないけど、みんながみんな、前世と同じ道を選ぶってわけじゃないと思うし・・・ユースアイのギルドは小さいところだから、いきなり追い返したりはしないと思うな。もつと大都市だと、大勢いて忙しいから、坊主みたいな初心者には手にされないかもしれないけど」

「そうですか・・・」

レオンは少し考え込む。

そこで男が可笑しそうに言った。

「今から戻れっというのはお断りだからな
慌ててレオンは首を振る。

「いえ！全然。あの、話して貰ってありがとうございます」

「あんな話でよければいつでも。しかし・・・前世の記憶がないから冒険者になりたいっというのも、結構な話だよなあ」

「やっぱり変ですよね」

「だなあ。でも、もしかしたら、お前、凄い奴なんじゃないか？」

突然の言葉に、レオンは戸惑う。

「え・・・何ですか？」

「だって、前世がないなんて奴、相当なレアなわけだ。もしかしたら、お前1人かもしれない。実は、凄い秘密があるとか、そういう事かもしれないだろ？」

「いや、秘密って言われても」

「もしかしたら、歴史に名を残すんじゃないか？サイレントコールドみたいに」

「だから僕、魔法使えませんか」

「じゃあ、スニークみたいに」

「僕の事、弱そうだって言ってたじゃないですか」

「いや、失敗したなあ。そんな大物だとは思わなかったから」

「あの、人の話を・・・」

「俺、伝説の男の旅立ちを案内した男になったわけか。どうせなら、もう少し為になる話をしとくんだったなあ。いや、今でも遅くない

か。そうか。そうだな。よし、じゃあ、とりあえず、俺の女性遍歴をざっと・・・」

全く為にならない予感しかなかった。

「いや、それはちよつと・・・」

「そうか？ 確実に為になると思うけど。お前だって、これから何人もの女性を泣かせることになるわけだし」

「勝手に変な予定を立てないで下さい」

「いやいや。絶対泣かせるぞ。冒険者だって、いろんな所をふらふらするわけだし。つまり、それだけ出会いがあるわけだからな。

特にお前は、腕っ節は弱そうだけど、見た目は悪くないっていうか・・・絶対、各所で女の子をひっかけていくタイプだな」

「人聞きが悪いですよ」

そこで急に、男の目が細くなった。

「よく考えたら、そういうタイプの男が一番迷惑なんだよなあ。うるちよろしないで一力所に留まってくればいいんだけど・・・でも、お前は伝説になってしまいうわけだから、そんなわけにもいかないだろうし」

何か言い返そうとしたが、なにやら雲行きが怪しかったので、黙り込む。

男の横目には明らかな敵意が込められていた。

「そうか。そうだよなあ。将来伝説になるとはいえ、今はまだひよっこなわけだ。ここでさくつと処分しておくって手もあるよなあ。いや、それどころか、ここで俺が倒せば、もしかして、俺が伝説の男って事に・・・」

「いえ、ならないです・・・よ、ね？」

最後の方は声にならなかった。男がすつとこちらを向いたからである。

もの凄い目をした男に睨まれる格好になった。

まだ平原の手前の山奥。

逃げたら逃げたで、気温や獣といった敵がいる。食料もほとんど

ない。

どうしよう。

だが、不意に男の表情が緩んだ。
助かった。

レオンの正直な感想はそれだった。

男がまた前を向きながら言う。

「まあ、そういう事だから」

急な言葉に、レオンは戸惑う。

「何がですか？」

「不用意に女に手を出すのはまずいつて事。変なところで恨みをか
つたりするからさ。だから、気をつけた方がいい。為になった？」

「・・・はい」

気をつけるもなにも、そんなつもりはさらさらないわけだから、
はつきり言つて余計なお世話だったが、口にすることは出来なかつ
た。

少なくとも、さっきの眼差しを忘れるまでは。

何事もなかったかのような口調で、御者の男は口を開く。

「しかし、天気いいなあ。これだと、明日の朝には着けそうだ。
お前もそのつもりで準備しとけよ」

「あ、はい。分かりました」

男は機嫌良さそうに口笛を吹き始める。全く聞いた事のない、テ
ンポの速い曲だった。

レオンはなんとなく、眼下に広がる平原を見つめる。

下っていく山道も、徐々に雪が減りつつある。標高が下がってき
た証拠かもしれない。ずっと山奥で育ってきたレオンにとって、初
めての下山。不安もあるが、やはり期待の方が大きい。御者の彼が
言うように、多くの人との出会いがあるだろう。最初に会った彼か
ら得た、記念すべき最初の教訓は、多少残念な内容だったけれど。
でも、面白い。

レオンは微笑む。きっとこれからそうだ。きっと楽しい事がた

くさんあるはず。

この先の平原。春の草原の中にある小さな町。ユースアイには、その姿も徐々に近づいてくる。

風も次第に暖かくなる。

春。

旅立ち。

雪の下から新芽が顔を出す。そんな季節だった。

導きの妖精

毛の長いマフラーを引きずったヒヨコが、頭の上を右往左往して
いる。

簡単に表現するなら、そんな感じだった。

レオンは自治都市ユースアイのギルド事務所にいた。正確には、
冒険者ギルド・アンリミテッドのユースアイ支部事務局。だけど、
この町まで連れてきて御者の人も、ここに来る途中で道を尋ねた人
も、皆がここを、単にギルド事務所と呼んでいた。それどころか、
目の前に座っている受付のお姉さんでさえ、正式名称では呼ばなか
った。レオンが正式名称を知ったのは、この入り口に書いてある
のを読んだからだが、それも掠れてしまっていて、かなり読みにく
かった。

入った途端にいかつい男達に睨まれる。そんなシチュエーション
を予想していたのだが、聞いていた通り、人は少なかった。それで
も、ぴりぴりした雰囲気の方が数人ベンチに腰掛けていたので、レ
オンは少し緊張した。

それでも、何事もなく窓口まで行き、冒険者見習いとして登録し
たい旨を説明すると、あっけなく手続きが始まった。田舎者のレオ
ンにとって、こういう手続きは初めてなので、何か失敗しないか心
配だったが、とりあえず、最初は上手くいったようでほっとした。

その矢先に、頭に飛び乗ってきたのが、この生物だった。

「・・・あの、すみません」

おずおずと聞くと、受付の女性がこちらを見上げる。自分より年
上のお姉さんで、理知的で落ち着いた雰囲気の人である。彼女はレ
オンの書類を作ってくれているらしく、椅子に腰掛けたままだった。
「はい。何か？」

ブラウンの瞳には、こちらをからかっている色は見えない。だが、

レオンの今の状態に気付いていないわけがない。

やや躊躇したものの、聞かないわけにはいかなかった。

「この、頭の上をうるちよろしてるのは・・・」

当然の質問だと思ったのだが、受付の人はきよとした顔で聞き返してきた。

「カーバンクルですけど・・・」

「いえ、それは僕にも分かります」

それくらいはレオンも知っていた。色違いだが、村に一匹だけいたからである。

「そうじゃなくてですね・・・なんで、僕の頭の上をうるちよろしてるんですか？」

受付のお姉さんは、ようやく理解したという顔になる。

「あ、すみません。最近だと、みなさん既にご存じの場合が多いので、説明を省略させて頂いていたんです」

はあそうなんですかと、レオンは生返事を返す。つまり、知らなかった自分の方が珍しいという事のようにだ。

「そのカーバンクルは、そうやって貴方の前世を見ているんです。もちろん全部は見られませんが、一部を読みとる事が出来ます。それを私に伝えて貰って、今度は私がギルドのレコードを調べます。そうすれば、貴方のおおよその適性が分かるんですよ」

そんな事が出来るとは初耳だった。村にいたカーバンクルは、ただのペット同然で、ほとんど役には立っていなかったからである。

「カーバンクルって、そんな事が出来るんですか？」

「あ、でも、それはギルドに住み着いている子だけです。他の場所にいる子には出来ないみたいです。特技とか芸みたいなものじゃないかとか、そういう役目として居着いているんじゃないかとか、諸説あるみたいですけど・・・」

「へえ・・・」

そこで、レオンの頭の上にいたカーバンクルが、受付の女性の方に飛び移った。反動のようなものはほとんど感じない。感じたのは、

ふさふさの毛の感覚だけだった。

藍色の瞳が一瞬だけこちらを向くと、そのまま受付の女性の頭の上って、そこでまたくるくと堂々巡りを始めた。

それを全く気にかける様子もなく、受付の女性は微笑んで、右手を部屋の奥に向けた。

「もうしばらくかかりますので、そちらにおかけになってお待ち下さい」

レオンは軽く頭を下げてから、示されたベンチに腰掛けた。入った時にそこにいた男達は、もういなかった。

他に見るものもないので、レオンは、女性の頭の上をくるくる回っているライトイエローの生物をなんとなく眺めていた。女性は気にする素振りもなく、書類作りに精を出しているようだ。

カーバンクル。別名、導きの妖精。

見た目で一番近いのは、キツネやイタチかもしれない。同じ4足歩行の生物。それを子供サイズに縮小して、体毛を長くふさふさにした生物というのが、だいたいの外見である。

だが、その実態の多くは謎に包まれている。

例えば、体重が非常に軽い事。体毛や瞳の色が様々な事。群を作らない事などが挙げられる。

だが、最大の不思議は、この生物には死というものがないという事実である。

カーバンクルには寿命がない。少なくとも、自然死した個体は知られていない。さらに、カーバンクルは食事出来るが、しなくても生きていける。食べても排泄はしない。眠る事もするのだが、それが必要なのかは不明。呼吸が必要なのかすらもはっきりしない。水中を普通に歩く個体もいるという噂だった。もっと言えば、どうやって数を増やしているのかも、まるで分からない。オスとメスがあるのかすらも分かっていないのだ。

今までにいろいろな学者が調べたが、まるで何も分かっていない。捕らえようにも、いつの間にか逃げてしまう。だから、大昔にもう

諦めてしまったというのが、レオンの村の長老の話だった。

まさに不思議生物なのだが、大昔の人達の間でも、そもそも生物となのかという話にはなっただけらしい。

そこで、とりあえずのカテゴリとして、カーバンクルは妖精という事になっている。他に妖精と分類されているものはないから、専用枠である。それだけ特殊な種なのだ。

そういうのはつきりしない存在なのだが、人を襲うわけでもないし、作物を荒らす事もない。気ままだが、大人しいし、鳴いたり暴れたりするわけでもない。特別な世話も必要ないし、懐いた人間なら言うことも聞く。そして何より、見た目が愛らしい。

そういうわけで、レオンの村ではペット以外の何者でもなかった。何か特殊能力があったわけではないが、見た目で少し癒される。見かけたら撫でてやって、何か食べ物でも与えてみる。それを食べる姿にまた癒される。はつきり言って、かなり良いご身分である。だけど、まあそれくらいはいいかなと思わせるくらいの愛らしさがあった。

だけど、ここのカーバンクルは立派に仕事をこなしているようだ。能力の理屈は不明だし、見た目には、人の頭の上をくるくる回っているだけなのだが、このギルドの一翼を担っているらしい。思ったより多才だった事に、レオンは驚きだった。

やがて、仕事が終わったのか、ぐるぐるしていたカーバンクルは不意に足を止めて、そのまま女性の頭の上で丸くなった。色合いもあって、金の王冠みたいに見える。

妖精は目を閉じていた。まさか、そこで休憩するつもりだろうか。その数秒後、女性は書類を持って立ち上がった。まったく頭上を気にする様子はないが、カーバンクルの方もバランス感覚がいいのか、張り付いたように動かなかった。

そのまま、女性はカウンターの奥の扉の向こうに消えた。

見るものがなくなってしまったので、仕方なく、事務所の中を見回してみる。

木で出来た建物。このベンチも、カウンターも椅子も、全部同じ木材を使っているようだ。照明はあまり多くないが、それでも十分なのだろう。あまり広くはない部屋に、事務員らしき女性が1人。レオンの母親くらいの年齢だろうか。その女性も、さっきの受付の人も、全く同じ服を着ている。ギルドの制服なのだろうか。黒が基調で、なんだが格好いい。そういう服を着ている人は、もちろんレオンの村にはいない。御者の人は小さい町だと言っていたが、レオンにしてみたら、十分都会である。

ここから始まる。

不意に頭を過ぎったその言葉に、レオンは急に気分が高揚してきた。緊張していたためだろうか、今まで忘れてしまっていたワクワク感が戻ってきたのである。

新しい世界。その始まりの場所。思ったより、劇的な事はなかったが、田舎者の自分にはこれくらいがちょうどいい。あまり刺激が強すぎても困る。

ここから頑張って、何とか一人前の冒険者になる。とりあえずはそれが目標だが、そこまでの道のりを想像するだけでも、レオンは楽しみで仕方なかった。

新しい出会いがあつて、新しい事を知って、新しい自分を見つける。

そこでレオンは、ふと気付いた事があつた。

自分の前世を見たい。それがこの旅立ちの目的のひとつでもある。だが、さっきの受付の女性は、あのカーバンクルが自分の前世を読みとってくれると言っていた。そして、詳しく調べるとも言っていた。

もしかして、それではつきりするのだろうか。

はつきりしてしまうのだろうか。

もしここで分かってしまったらと思うと、レオンの胸中は複雑だった。目的が達成されるのだから、もちろん悪いわけではない。だからといって、こんなにあっさり分かってしまうと、自分の悩みはな

んだったのかと思えてしまう。

どちらがいいんだろう。

聞きたいような、聞きたくないような。

レオンの予定では、自分の前世が分かるのは、見習い冒険者卒業の時だった。

一人前の冒険者として認められるには、魂の試練場というダンジョンを攻略しなければならない。その最奥で、その冒険者はカーバンクルと会おうと言われている。そのカーバンクルが、自分の魂の場所まで案内してくれると言われているのだ。

その魂の名前がアーツ。

前世の自分が、来世の自分の為に残した遺産。それを手に入れる事が、冒険者の証。

それを手に入れたら、自分の前世の事が分かる。

そんな予定を立てていたのだけれど。

「レオンさん」

不意に名前を呼ばれて我に返ると、いつの間にか、受付の女性が戻ってきていた。頭の上の妖精もそのままである。本当に装飾品みたいだった。

レオンは慌てて立ち上がって、窓口に向かう。

ここで分かってても、まあ、それはそれでいいじゃないか。懸念がひとつ解消されたと思えばいい。どちらにしたって、冒険者を目指すのは一緒なんだから。

だが、どうやらそんな話ではなかったようだ。受付の女性の表情は、傍目にも分かるくらい困惑顔だったのである。

「あの・・・申し訳ないんですけど、該当するレコードが見つからなかったんです」

レコードというのはよく知らないが、要は、自分の前世がよく分からなかったという意味だろう。

嬉しいような、残念なような、入り交じったような表情で、レオンは頷いた。

「そうですか・・・あの、やっぱり、珍しい事なんですか？」

女性は控えめに頷く。少し揺れたはずだが、頭上のカーバンクルに起きる気配はない。

「ええ、まあ・・・それで、出来たら、レオンさん自身が見た前世の記憶を教えてくださいませんか？そこからまた探してみますので」「記憶ですか」

レオンは苦笑した。ないものは教えようがない。

「あの・・・？」

「あ、いえ、実はですね・・・あの、驚かないで下さいね」

「驚くような前世なんですか！？」

何か期待するような響きが含まれていた気がしたが、それは必死に無視した。

「実は、僕、前世の記憶がないんです。今まで全く、夢を見た事がなくて・・・」

レオンはなるべく驚かせないようにゆっくりと言ったのだが、無駄だったようだ。

思いつきり気まずい静寂。

受付の女性は完全に固まっているし、奥で事務をしている人も、手が止まっていた。

他に誰もいなかったのが、救いといえば救いだった。

カーバンクルだけが呑気に眠っている。

どうしようかと困り果てたところで、受付の女性が絞り出すように言った。

「・・・あの、冗談ではないですよね？」

レオンは慌てて手を振る。そう思われるのが一番困る。

「いえいえ！そんな、冗談なんて・・・」

それを見て、受付の女性は額に手を当てた。何やら難しい顔をしていた。

「・・・もしかして、何か問題があったりしますか？」

もしかしたら追い返されるかもしれないという懸念が、再び顔を

見せ始める。

しばらく間があつてから、女性はこちらを向いた。

「えつとですね。ギルドに加盟する事は可能です。それ自体には、特に資格というものは必要ありませんので。ただ、前世が分からないというのは、レオンさんにとって不利になります。適性が分からないという事になりますから、何でも手探りという事になります。ですが、あの、もちろん、ご存じだと思いますが・・・」

そこで女性は間を取った。レオンもなんとなく姿勢を正した。ここからが、特に重要な話なのだ。

「冒険者は戦闘に重きを置きます。最初はある程度の安全を確保してありますが、基本的には命がけです。ですから、手探りと口で言うのは簡単ですが、その手探りにも命の危険がつきまといまいます。人より苦勞するのはもちろんですが、冒険者の場合は、苦勞だけで済まない事もあるんです。あと・・・これは申し上げにくいんですけど、レオンさんが仲間を探されるときに、恐らく障害になると思います。他の皆さんも命がけです。冷たいようですが、適性を十分に生かせていないレオンさんを受け入れる人は少ないと思うんです」

正直、シヨックな話だった。

こんなに自分にハンデがあるとは思っていなかった。自分だけで済むならともかく、仲間が見つからない可能性まであるのだ。

そうなったら、ずっと1人で戦うのだろうか。

それは無理だろう。何より、辛いだろう。

だけど。

レオンは微笑んだ。

「大丈夫です」

女性の瞳が少し大きくなる。

「心配してくれてありがとうございます。でも、とりあえず、やってみようと思うんです。あまり強くなれないかもしれないし、仲間も出来ないかもしれないけれど・・・でも、やってみないと分からないですから。とにかくやってみます。それでもダメだったら、村

に帰るなり、他の仕事を見つけるなりします。それくらいの決断は出来るつもりです。だから、挑戦だけはさせてくれませんか？」

「しばらく1人のままかもしれません。1人はつらいと思います。無理して冒険者にならなくてもいいんですよ？」

「1人じゃないですよ。ここまで乗せてきてくれた行商の人が言っていました。この町は良い人ばかりだって。だから、なんとかariusます。ギルドの受付のお姉さんも、すごく優しい人ですし」

女性の真摯な瞳としばらく見つめ合った。

だが、やがてふつと微笑んでくれた。

「分かりました。では、ギルドとして正式にサポートさせて頂きます。何か分からない事がありましたら、何でも聞いて下さい」

「はい。これからよろしくお願いします」

レオンが頭を下げると、女性も少し笑って頭を下げる。

「よろしくお願いします」

その揺れには耐えられなかったのか、黄色のカーバンクルが頭からカウンターに滑り落ちてきた。

だが、目覚める気配はなかった。

気持ちよさそうに眠っている。

レオンと女性は、それを見て笑った。

「お疲れみたいです」

「そうですね。レオンさんの前世がなかなか見えなくて、大変だったみたいです」

「・・・すみません。起きたら代わりに謝っておいて下さい」

「それでしたら、今どうぞ。撫でてやると喜びますから」

レオンは少し意表を突かれたが、すぐに撫でてみた。

村のカーバンクルとは色が違ってても、手触りはほとんど同じだった。ふかふかでふわふわ。いつまでも触っていたくなる。

「・・・あの、名前はなんて言うんですか？」

「私ですか？」

その言葉に、レオンは気付いた。

「あ・・・そういえば、聞いてませんでしたね」

「聞きたかったんですか？」

女性は悪戯っぽく笑う。なんというか、年上の余裕みたいなものを感じた。

少しどきどきしたが、そこで蘇ってきたのは御者の言葉だった。妙なトラブルは遠慮したい。

「あ、いえ、すみません、その・・・聞かなくても、大丈夫ですよ
ね」

戸惑ったように言うと、それが可笑しかったのか、女性は吹き出した。

「すみません。そんなに困るとは思わなかったので・・・」

「そ、そうですね。こちらこそ・・・」

「ケイトと呼んで下さい」

そう名乗ってケイトは微笑んだ。理知的で落ち着いた、ブラウンの髪と瞳の女性。恐らく20歳前後だろう。格好いい制服と、まとまったヘアスタイルのせいで大人っぽく見えるだけかもしれないけれど、少なくともレオンより年下という事はない。

「あと、この子はシニアです。もちろん、私が名付けたわけじゃないですけどね。だけど、このギルドで一番の年上なのは間違いないです」

「ということは、もしかして、町が出来てからずっといるんですか？」

「はい。少なくとも、もう400歳以上」

「へえ・・・」

どういうわけか、カーバンクルは一カ所に居着く事が多いらしい。人から聞いた話だったが、ここの妖精も、その例に漏れないようだ。その最長老の大御所も、今は愛らしい姿で寝息をたてていた。

マスター・ガレット

ユースアイはのどかな町だった。

きつと住みやすく豊かなのだろう。少なくとも、レオンのいた村とは比べものにならないほど過ごしやすい。この時期、村はまだ雪解けしている頃だが、ここは完全に春の装いである。町の周囲は綺麗な緑一色だったし、空気もまったく冷たくない。山を下ってきたとはいえ、ここもそこそこの標高があるはずだが、それでもこんなに違いがあるのかとレオンには驚きだった。

町の中は思ったほどうるさくはないが、もちろん、村よりも圧倒的に人が多い。そもそも、町の大きさが違うのだ。村何個分だろうかと思えるくらいの広さがある。大通りには石畳が敷いてあって、石造りの建物もある。どちらも、村にはなかった物だった。そもそも、道なんて概念がない場所だったのだ。

そんなわけで、田舎者のレオンだと、道に迷う可能性が十分にある。闇雲に歩いたら、確実に迷子になる自信があった。ギルド窓口のケイトさんに、大通り沿いにありますと説明されていたので、とりあえず石畳の上から出ないようにしているが、それでも不安なので、度々道を尋ねた。結局、歩いて10分くらいですと言われた場所にたどり着くまでに、30分はかかっただろう。もつとも、あまりの物珍しさに、思わず商店などを眺めたりしていたので、それで余計に時間をとられたのもあっただろうけれど。

それでもなんとか、目的の場所にたどり着いた。まだ日は高い。もしかしたら、日が暮れるまで迷う羽目になるかもしれないと覚悟していたが、なんとかなったようだ。

レオンが立っているのは、木製の巨大な両開きのドアの前。看板には、ガレットの酒場の文字。

見上げると、本当に巨大な建物だった。レオンにしてみれば、こ

の町の建物はどれも十分に立派な物ばかりだったけれど、この建物は立派を通り越して、否応なく威圧感が感じられる。恐らく、木造3階建て。もしかしたら、4階があるのかもしれないが、レオンにとつては大差ない違いだった。幅も奥行きも、もの凄く広い。凄い物だという感想はもちろんなあつたが、どちらかというと、倒れてきそうで怖いなという思いが強かった。いったいどうやって、こんな巨大な物を支えているのだろうか。

何はともあれ、自分はここでお世話になるんだ。

レオンは深呼吸した。

やっぱり、少し緊張する。

そう思った時だった。

「じゃあ、ちよつくら行つてきまーす」

扉越しに、女の子の声が聞こえた。活発そうな、明るいい口調だった。

それに答えたのは、対照的に、低くて、野太い声だった。

「しつかりと息の根を止めてこい！」

もの凄く物騒な発言だったが、声に似合い過ぎていた。

「分かつてるつて。というか、今日も来るわけ？」

「俺の勘がそう言つてる。新米はこの時期になると、懲りもせず次から次へとやってくる、相場は決まつてる」

「そっかー。まあ、そうかもね」

「だから、ここできつちり処分しておかねえと面倒な事になる」

「でもさー、ケイトさんからの依頼を待った方がよくない？」

「あんなもん待つてられるか！とつと行つて、さくつと仕留めて来い！それがめえの仕事だろうが！」

「はいはい。じゃあ、まあ、出会い頭にぶすつとやってくるよー」
そこで扉が開かれようとしていた。

レオンはどうしようか迷った。

新米つて、自分みたいな冒険者見習いの事だろうか。

その息の根を止める。処分する。さくつと仕留める。

何でだろうか。

ケイトさんからの依頼とか言っていたけど。

その理由は分からない。分からないけれど、もしかして大ピンチだろうか。

逃げようかとも思ったが、扉が開かれるまで一瞬だったため、そんな暇はなかった。

扉の正面にレオンは立っていたため、必然的に、出てきた人物と目があった。

彼女もまた、ブラウンの瞳をしていた。年の頃は、たぶんレオンと同じ10代半ばくらい。利発そうな顔立ちに、栗色の髪を高い位置で縛ったヘアスタイルが相まって、より活発そうな印象が際だっている。

扉越しに聞こえた声は彼女のものだろう。だけど、顔立ちはともかく、あまり荒事が出来るようには見えなかった。一般的な少女のどちらかという華奢な体つき。しかも、厚手の淡いピンクの服の上に、白いエプロンを着けている。すごく平和的な格好だ。

それでも、出会い頭にぶすつとされないか、一応警戒してしまっただ。

「あ、もしかして、見習い冒険者の人？」

少女がさばさばとした感じで聞く。

ここではないと言ったら、今度こそ刺されるのだろうか。

だが、レオンが返事をする前に、少女がすたすたとこちらに歩み寄って来て、あつという間に腕を掴んできた。

「え？あ、いや、その・・・」

慌てるレオンに、少女は笑いかける。屈託のない笑みだった。

「まあ、いいからいいから。お父さんに挨拶するんでしょ？」

「お父さんって？」

「いいからいいから。とにかく、入った入った」

楽しそうにそう言いながら、少女はレオンを店内に引っ張り込んだ。

店内は想像通り、もの凄く広かった。

中央の奥にカウンターがあり、その両脇には上り階段がある。そして、それ以外の場所には、丸いテーブルとイスが山ほど置いてあった。こんな大規模な建物の中に入るのは、もちろん初めてである。床も壁も木製で、特に光沢があるわけではないのだが、不思議と輝いて見えた。照明がたくさんあるせいだろうか。その照明も、見上げるくらい高い位置にある。

物珍しさに店内をキョロキョロ観察しているレオンを、少女はぐいぐいとカウンターまで引っ張っていく。屋内には食欲をそそるいい匂いが漂っていた。

店内のテーブルには空席が多いが、それはまだ昼間だからだろうか。それでも、こんな時間から酒を飲んでいるお客が10人ほどいた。そして、その全員が強面で、体つきがいい。間違いなく荒事をしている人達だろう。

つまり、冒険者達。

彼らと同じ場所にいる。その事実嬉しくなったが、目が合うと睨み返されたような気がしたので、じろじろ見るのは控えた。

10秒余りの道のりで、カウンターまでたどり着く。その辺りは、つんとした匂いが漂っていた。お酒の匂いだろうか。

そこにいる人物を見て、レオンは驚く。

なんというか、本当に想像通りの人物だったのだ。ギルドでは肩すかしだったが、時間差でついに巡り会ってしまった。特に会いたかったわけではないけれど、意味もなく感動した。

カウンターにいた男は、少女と言葉を交わす事なく、いきなりレオンに質問した。

「見習いか？」

「あ、はい・・・あの、ガレットさんですよね？」

男は値踏みするようにレオンを見てから、少女の方を向いた。

「おい。お前はとっとと仕事してこい」

「なんでー？こっちの方が面白そう」

「見せ物じゃねえんだ。いいから、さつさと終わらせてこい」

「しつかなないなあ。まあ、また後で会えるからいっかなー」

少女は諦めたようにそう言つと、不意にレオンの肩を叩く。

レオンがそちらを向くと、少女は不敵な笑みを浮かべた。

「頑張つてね。うちのお父さん、この町で最強だから」

「最強？」

「じゃあね。また後で」

そう言つてウインクすると、軽やかな足取りで店から出ていった。何を頑張るんだろうとレオンは首を捻つたが、よく分からなかった。とりあえず、刺されなくて済んだ事が、よかったといえはよかった。

「名前は？」

唐突に問われて、レオンはまたカウンターの男に視線を戻す。

「あ、すみませんでした。レオンです」

男は腕を組んだ。それだけで、剥き出しになった二の腕に相当な大きさの力瘤が出来た。

まさに想像通りである。

カウンター内に立っている目の前のこの男こそ、レオンがおぼろげに想像していた人物そのものだった。冒険者に志願した自分を出迎えるのは、きっとこういう人物だろうと思つていたのである。

浅黒い肌に逞しい体つき。厳めしくて、彫りの深い面構え。頼りになる人物というのはもちろんだが、見習い冒険者を指導する立場の人物としても、申し分ない容姿だった。具体的には、それだけの威厳と威圧感が間違いなく備わっている。そして、腕っ節もあるに違いない。少なくとも、腕相撲では絶対に勝てないし、腕を折られたとしても不思議はなかった。

まだ名乗つて貰つていないが、彼が恐らく、この酒場の主人のガレットだろう。

「レオン。お前、ギルドに行ったか？」

「はい。それで、ここに挨拶してくるように言われて・・・」

「そうか」

男はレオンの言葉を遮ってそう言った。

こちらをじっと見つめてくる。見つめるというのは穏やかな表現で、レオンにしてみれば、睨まれている感じだった。

「1年だ」

突然、男はそう言った。

「はい？」

「1年だけは面倒みてやる。だが、それで駄目なら諦める。これが約束出来るか？」

レオンは自分に問いかけてみた。

周囲からは静かな話し声が聞こえてくる。誰もこちらを気にしている様子はない。それも当然だと言えるだろう。自分はまだ見習い以下の、とるに足らない存在。

レオンの答えは一つだった。

「あの・・・1年もお世話になっていいんですか？」

こんな自分を1年も面倒をみてくれるなんて、こんなに有り難い話はない。

男の太い眉がぴくりと動く。

だが、次の瞬間、にやりと笑った。男臭い、だけど、さっぱりして印象のいい笑みだ。

「ガレットだ。寝床と飯は俺に任せろ。特に、お前の身体はまだまだ成長の余地がある。もっと食わせてやるから覚悟しろ」

「食わせてって・・・そこまでして貰っていいんですか？」

そう聞くと、ガレットは笑った。

「謙虚な奴だな！いいから食え！とにかく食え！ちゃんとギルドから金を貰ってるから、そんな事は心配いらねえ。お前が立派な冒険者になって、そこで儲けて金を返せばいいんだよ」

「あ、なるほど・・・」

レオンは頷いた。そういう仕組みだとは知らなかった。

「お前、何も知らないんだな。最近、妙な知識ばかりつけた連中

が多いから、それが当然ってふんぞり返ってる奴がいるんだ。そういう奴を見極めて、腐った奴を半殺しにするのが俺の仕事だ」

「半殺しって・・・」

店に入る前の、物騒な会話が頭を過ぎる。

「そういうわけだったんだが、俺はもう決めた。お前は面倒みてやる！1年間、せいぜい頑張ってみろ！」

そう言つて、愉快そうに笑いながら肩を叩いてきた。床が抜けるんじゃないかと思うくらいの衝撃で、きっと骨が少し歪んだだろう。だが、半殺しに遭うよりは何倍もいい。

「これからよろしく願います」

頭を下げるレオンを見て、ガレットはまた笑った。そして、自分がイスに腰掛けると、レオンにも座るように言った。

レオンも近くのイスに座った。

「俺も昔は冒険者だったんだ」

ガレットはそう切り出した。

「お前のような見習いの時期も当然あった。だから、多少はアドバイス出来る。ただ、専門的な事は難しいが・・・レオン、お前はジニアスか？」

「いえ、一応アスリートの方を」

前世云々の話は、出来たら避けたいところだった。

ガレットはレオンの身体を一瞬だけ眺める。

「そうか・・・しかし、お前だと重い鎧は無理かもしれねえな。武器屋には行つてみたか？」

「いえ、まだ全然」

「そうか。なら、まだ日が高いうちに行つてこい。鎧の仕立てには時間がかかるから、一日でも早い方がいい」

「分かりました」

「時間があつたら、道具屋と、あと伝承者にも会つてこい」

「伝承者？」

「それも知らねえのか・・・くそ、肝心な時に、あの馬鹿娘はいね

えしな」

馬鹿娘というのは、恐らくさつきまでいたエプロン姿の少女だろう。今はどこかに行っているが、それは目の前の父親が追い払ったからである。だが、それを堂々と指摘する度胸はない。

「まあ、あの馬鹿に期待しても仕方ねえな。とりあえず、今日するべき事は分かったな？」

「はい。場所が分からないですけど」

「それは教えてやる。だが、その前に・・・」

急にガレットはイスから立ち上がって、そのままカウンター奥のドアを開けて、その中に入ってしまった。

調理場だろうか。開けた瞬間に、いい匂いが漂ってきたので、なんとなくそう思った。

そういえば、まだ昼食を食べていなかった。

お腹が減った。そう思った瞬間だった。

ガレットがドアの向こうから姿を現す。だが、レオンの目が釘付けになったのは、彼が持っている物だった。

羊肉だろうか。その巨大なステーキ。

こんな肉の塊を見るのは、お祭り以外では初めてだった。ガレットはその肉が盛られた器を、レオンの前に置いた。

「とりあえず、今日はこれくらいで勘弁してやる」

レオンはそれをまじまじと見つめてから、急に居ても立ってもいられなくなってきた。

「いえ、あの・・・こ、こんなに!？」

ガレットは可笑しそうに言う。

「食えねえってのか?これくらい食わねえと、体力つかねえぞ」

「いえ、そうじゃなくて・・・」

「何だ?男だったら、はつきり言ってみろ」

「こ・・・これ、凄く高価なものなんじゃ?」

レオンにしてみれば、当然の疑問だった。

こんな豪華な食事を食べる事なんて、村では滅多にない事なのだ。

それこそ、一年に一度の祭りくらい。量もそうだが、この金銭感覚のギャップに、戸惑わざるを得ない。

だが、しばらくの沈黙の後、ガレットは大笑いした。

「気にするな！とにかく食え！食って食って食いまくれ！そうしねえと、ここ一番って時に力が出ねえぞ！」

そう言われても、なかなか踏ん切りがつけられるものではない。

「さっきも言っただろ？ギルドから金が出るんだ。つまり、お前の先輩達が出した金だ。その先輩達も、見習いの頃はギルドの金で飯を食ったんだ。俺だってそうだ。お前は俺が出した飯を食って、それを血と肉にして、次の奴らの為に金を稼げばいいんだよ」

正直、まだ迷っていた。レオンの村はあまり裕福とは言えないからである。

だけど、これを通るべき道なんだ。

レオンは肉を切って、口に入れた。

齒ごたえがあって、肉汁が口の中に広がる。

「美味しい・・・美味しいですね！」

控えめに口にしたが、実際には想像以上の味に感動して泣きそうだった。

次々と口の中に放り込む。その勢いは全く衰えない。

ガレットはイスに座って、そんなレオンを眺めていた。相変わらずの厳しい顔の中にも、どこか優しいものが含まれていた。

「そうだな・・・夏までに体重を、今の半分増やせ」

その言葉に、レオンは吹き出しそうになった。

「半分！？半分って・・・ぶくぶくになりますよ」

「誰が肥えろって言ったんだ？食って、鍛えて、筋肉にするんだよ。いいか？夏までだ！そうしねえと、一年で魂の試練場を攻略するなんて絶対出来ねえ。とにかく、必要なのは身体だ！鍛えて鍛えて鍛えまくれ！」

そこで、店のドアが開いた。

聞こえてきたのは、先ほどの少女の声だった。

「あつれー？まだ生きてたの？」

いきなりの発言に、レオンはむせた。

「お前、仕事は？」

ガレットの声が少し低い。その目の前にいるレオンは、ステーキを頬張りながらも若干不安になった。

レオンは振り返ってみた。

少女は父親の威圧感をものともせず、すたすたとこちらに歩いてくる。

「途中でホレスに会ったから、任せてきちゃった。別にいいでしょ？」

「あいつか？なんで町にいるんだ？」

「知らないけど、別にいいじゃん、どこにいたって。それよりも・
・彼、ご飯食べてるって事は、合格なの？」

「何か悪いか？」

「悪くないけど・・・へえー」

少女がこちらの顔をまじまじと見つめてくる。やや切れ目だが、大きな瞳。あまりに遠慮のない視線に、レオンは少したじろいだ。

「おつかしいなあ・・・ちょうどぼっこにされてる頃だと思って、楽しみにしてたのに」

「楽しみって・・・」

そんな事しまないで欲しいと、レオンは心底思った。

少女はガレットに視線を戻す。

「何がよかつたの？なんか、私の方が強そうだけど」

ずばずば言うなあと思ったが、どちらが強いかはともかく、自分が弱そうに見えるのは確かである。それに、実際に喧嘩する事になったら、自分は女の子を殴れないだろうから、そういう意味では間違いないと言えない。

「ギルドが許可したんだつたら、そもそも俺がどうこう言える立場じゃねえんだよ。合格も不合格もねえ」

そうなのかと思ったが、案の定、少女はすぐに反論した。

「うつそだー。今まで何人も追いついたくせに。ギルドが断った人よりも、お父さんが追いついた人の方が、絶対多い」

「俺が追いつくような奴は、どうにもならねえ奴らばかりなんだよ。そういう奴をギルドで追いついたりしたら、変に逆恨みする馬鹿もいるから、一旦許可してこっちまで連れてこいつて言っただけだ。そこで俺が綺麗さっぱり諦めさせてやる。断りの代理をしてるだけなんだよ」

「お父さんだって、逆恨みされたら困るでしょ？」

「俺に逆恨みする度胸があるなら、いいじゃねえか。その時は面倒みてやる」

「私とかお母さんとかを狙ってきたらどうしてくれるの？」

「いい度胸だ。そんな奴はどうしようもねえから、きっちり止めを刺してやれ」

「私の身は可愛くないのかー？」

「可愛いだあ？普通の娘だったらまだ分かるけどな」

「私、普通の娘！」

「誰が普通なんだよ。普通の娘は、親父の殴り合いを見て喜んだりしねえだろうが」

「むう。でも、血を分けた娘なんだから、普通は少し心配になるものでしょ？」

「心配したなあ。昔は」

「普通は今も心配でしょ！私、年頃の娘なんだけど！」

「年頃は年頃でも、お前は棘があり過ぎるんだよ！お前に手を出そうなんて命知らずな男がいるわけねえだろうが！」

「それはお父さんのせいだって！俺を倒せる男じゃないと嫁にやらかとか、そんな恥ずかしい事を堂々と言われたら、誰だってちよつと引くに決まってるでしょ！」

「それだけじゃねえだろうが！お前が今まで何人の男を返り討ちにしたと思っただけだ！そんな女に誰が近寄ろうとすんだよ！」

「下心丸出しの奴だったら、身を守って当然でしょ！」

「それらしい守り方があるだろうが！普通の娘は実力行使に出たりしねえんだよ！」

「実力があるんだからいいでしょ！」

「まずそこが普通じゃねえんだよ！」

いい加減、レオンは口を挟む事にした。

「あの！」

凄いい形相の2人に睨まれて、レオンは思わず両手を挙げた。その両手にはナイフとフォークが握られたままである。

圧倒的な視線に負けそうになりながらも、レオンはなんとか進言した。

「・・・喧嘩はやめませんか？他のお客さんもいるし」

そう言って周囲に視線を走らせてみるが、どういうわけか、誰も気にした様子はなかった。

もしかして、いつもの事なのだろうか。

ガレットとその娘は、2人同時に大きく息を吐いて、そして、一瞬で口元に笑みを見せた。

「・・・そうね。今日はまあまあよかったかも」

「そうだな。悪くない」

レオンには、その言葉の意味が分からなかった。

「え？・・・あの、どういう意味ですか？」

2人は何食わぬ顔で言った。

「親子のコミュニケーションなの。たまにやるんだけど、今日は結構いい戦いだったわ」

「ストレス発散でもある。なかなかスッキリするんでな」

レオンの身体に、どっと疲れが押し寄せた。

どこからか、その戦いだったのだろうか。気を揉んだ自分が馬鹿みたいである。

そこで、ガレットが思い出したように言った。

「ベティ。そいつが飯を食い終わったら、伝承者の所まで案内してやれ」

「デイジーのどこ？」

「そうだな・・・それと、ニコルの所も」

「ニコルもー？大丈夫なの？」

「真面目な奴だから、大丈夫だろ」

「染まつちゃったら困るでしょ」

「いざとなったら、俺がどうにかする。とにかく、会わせてみる」

「はい。まあ、面白そうだからいいけどね」

なんて素直な返事なのだろうか。さっきの口喧嘩は本当に嘘みtaiである。そういえば、店に入る前の会話も結構スムーズなものだった。

そこでレオンは気付いた。

「あ・・・ベティさんっていうんですか？」

そちらを向いて聞くと、ベティは微笑んだ。栗色のポニーテールと瞳が印象的な、活発そうな少女。腕が立つようだが、それももしかしたら冗談なのかもしれない。

「そう。ベティ。その親父の娘で、ここでも働いてるからよろしくねー」

「あ、はい。僕はレオンです。よろしく」

「レオンはさあ・・・」

すぐに会話を始めようとするベティをガレットが止めた。

「先に飯を食わせてやれ。冷めちまうぞ」

「あ、そうだねー。さあ、とつとと食えー」

ベティが笑いながらレオンの背中を叩く。

その衝撃で食べ物が変な場所まで入ってしまい、レオンはしばらく咳が止まらなかった。

名店の看板娘

自称、ガレット酒場の看板娘のベティは、気さくというよりは、かなりの話好きな人だった。

なんとか豪華ランチを攻略したレオンを待っていたのは、彼女との苛烈なトーク。質問責めのフルコースだった。レオンを武器屋まで案内してくれる道すがら、彼女の口が休む事はない。全く遠慮のない視線と物言いに圧倒されて、レオンは個人情報ほとんど吐露する羽目になっていた。

他にも、村の事、家族の事、友達の事、さらには、気になった女の子の事まで。

そして、レオンがなるべく言うまいと思っていた事も、あつという間に暴露させられた。

「へえー。それって、記憶喪失みたいなものじゃない？」

石畳の道から、脇道に入った所だった。

ベティがそう評価したのは、前世を見た事がないというレオンについてである。

「記憶喪失ですか？」

「そうそう。こう・・・なんていうの？強いショックとか受けたら人って記憶を忘れちゃう事があるみたいなんだ。私が懲らしめてやった奴らが、よく言うのよねー。あの日の事が思い出せないって」それは思い出せないのか、それとも思い出したくないのか。いずれにしても、聞いてて楽しい話ではなさそうだ。

「前世がない人っていうのは、ちよつと聞いた事ないし。だから、忘れてると思うのが普通なんじゃないかなー。案外、お父さんに1発貰ったら、ショックで思い出すかも。やってみたら？」

「え、いや・・・1年経つてもダメだったら、その時はお願いしま

す」

ベティは可笑しそうに笑う。屈託のない笑い方だった。

「分かった」。その時は私も加勢してあげる」

「やめて下さい。そもそも、一発だけなのに、どうやって加勢するんですか」

「特別製の重いやつを貸してあげる。それで、ドカンと・・・ね？」
何か、ハンマーみたいな物を振り下ろす仕草。

「ねって言われても・・・逆に現世の記憶も忘れてしまいそうなので、出来たら素手の方でお願いします」

「あ、ここだよ」

レオンの言葉を華麗にスルーして、ベティは足を止めた。

彼女のすぐ脇に建っているのは、普通の民家をさらに縮小したような、はつきり言って小屋みたいな所だった。レオンも立ち止まって、そこをまじまじと見るが、見れば見るほどこじんまりとした建物である。看板のような物もどこにもない。小屋自体は石を積んで造つてあるようだ。

「・・・ここ、何ですか？」

ベティはその言葉も無視して、その小屋のドアを無造作に開けた。

「たのもー」

そう言つて、レオンの腕を掴んで小屋の中に引きずりこんでいく。引きずられるまま中に入ったレオンだったが、中を見ても、そこが何なのか分からなかった。狭い室内には大きい台と椅子が2つあるだけ。商品らしきものもない。レオンたちが入ってきたドアとは反対側、台を挟んだ向こう側に同じ大きさのドアがあるが、他には窓すらない。

だが、人間なら1人だけいた。

台にもたれ掛かるようにして、奥の方を向いていた少女が、こちらを振り返る。

一瞬少年だろうかと思うほどの中性的な顔立ち。服装も、白いシ

ヤツの上にポケットの多い黒のベストという、どちらかというと男性的なファッションである。それでも彼女を女性だと思ったのは、整った小さな顔と線の細い身体、そして、ベティと同じポニーテールからだった。ただし、髪色はやや赤みがかったライトブラウンで、瞳の色も明るい。凛々しい顔立ちとギャップがあつて、どこか不思議な印象がした。

少女は一瞬だけこちらを見たが、すぐベティに視線を戻した。

「何？あれならまだ出来てないよ」

容姿は少年っぽいが、声は確かに女性のものだ。

「そうじゃなくて、彼、今日見習いで来たんだ。だから、鎧の注文」
「何？」

少女がこちらを見る。レオンはとりあえず、挨拶した。

「どうも初めまして。レオンと言います」

こちらをまじまじと見る少女。なんとなく気まずかったが、とりあえず黙っている事にする。

「・・・なんか弱そうだけど、大丈夫なの？」

やっぱりそう見えるんだなあと、レオンはちよつと落ち込んだ。

「さあ？一応お父さんがオツケー出したから、たぶん大丈夫なんじゃない？」

「ガレットさんが？へえ・・・」

信じられないといった表情だった。そんなに弱そうに見えるのだろうか。

「まあ、そんなわけだから、鎧作つてあげて。出来るだけ軽くて丈夫なやつ」

「そんなの当たり前。みんなそう言うよ。もっと詳しい注文はないの？」

「そうだねー。とりあえず、あんまり重い鎧は無理なんじゃないかって・・・後は、初心者だから、安くて適当なやつでいいんじゃないかなー。どうせすぐ壊すだろうし」

酷い言われようだったが、もしかしたら、最初はすぐ壊れるのも

のなのかもしれない。

だがやっぱり、その注文ではダメだったようだ。少し呆れたような顔をして、少女は奥のドアに手をかけた。

「父さんに聞いてくるから、ちょっと待ってて」

そう言い残し、少女は扉の向こうに消えた。

小屋の中は静かになる。

レオンはベティに聞いた。

「あの・・・父さんってというのは？」

ベティは不思議そうな顔で聞き返す。

「父さんって、父親の事だけど？」

「それくらい知ってます。さっきの人のお父さんは何をしてる人なんでしょうか？」

「武器屋っていうか、鍛冶職人なんだ。向こうに工房があるの。ここは、一応店なんだけど、商品は陳列しないんだって。注文貰ってから作りたいんだってさー。その人に合った物しか作りたくないからって」

「へえ・・・」

「すごいんだよー。ジェフさんは、王様から賞を貰った事もあるんだから」

「本当ですか!？」

ベティはあっさりと言ったが、それはもの凄い事なんじゃないだろうか。王様直々に賞を授与される事なんて、滅多にない事のはずである。

「だから、たまに遠くからお客さんが来る事もあるんだ。よかったね。そんな人に武器とか鎧の面倒をみて貰えて」

「あ、はい。僕にはもったいないような気がしますけど」

「そんな事ないと思うなー。あの一家は、みんなマニアなんだよ」

「マニア？」

「そうそう。あの家は・・・」

そこで、奥のドアが開いた。顔を出したのは、先ほどの少女であ

る。

「こっちに來て」

何の前置きもなしにそう言われたので、レオンはすぐに反応出来なかったが、ベティの方は慣れた様子で少女の方に歩き出す。

それを見て、少女の方が止めた。

「ベティ。その格好で入るの？」

言われた本人は立ち止まって、自分の服装を確認する。淡いピンクの厚手のワンピースに、白いエプロン。春らしい装いだと言える。「まあ、いいんじゃない？余所行きってほどじゃないし」

「汚れたら大変だよ。着られなくなってから後悔しても遅いんだからね」

「怖いこと言うなあ」

ベティが迷っているところを、レオンは始めて見た。服の事は気になるのだろう。やっぱり女の子なんだと、失礼な感想を抱いてしまった。

「分かった。私、留守番してるね。ジェフさんによろしく」

「はいはい。誰か来たら、適当に接客しといて」

「適当でいいのー？」

「適当がいいの。変な注文だけはとらないで」

「変な注文って、どんな注文？」

そこで少女は口ごもった。若干だが頬が朱い事に、レオンは気付いた。

「・・・とにかく、よろしく。レオンさんは、こっちにどうぞ」

そう言って、少女は扉の向こうへ消えてしまった。

いったい何があったのだろうかと思って、レオンはベティの顔を見たが、彼女はいつもの微笑みを返すだけだった。少し悪魔的な笑みだったかもしれないが。

とりあえず、それは見なかった事にして、レオンも奥の扉を開ける。

そこは屋外だった。すぐ前に下り階段があって、その終点の先に

金属製の扉がある。その扉の前に少女が立っていた。

レオンはそこまで歩いていく。

どうやらそこは、地面をくり抜いて作った地下室のようだ。石の壁面に鉄の扉。レオンの村にはない、立派な物だ。

扉の前まで来ると、熱気のような物を感じた。それと同時に、金属を叩くような音もはつきりと聞こえてくる。

「服が汚れるかもしれないけど、それくらいは大目に見て」

少女はにこりともしなかったが、冷たいというよりも、むしろ格好いいと思った。不思議な感覚だ。

「あ、はい。それは平気です」

「あと、なるべく静かにしてて」

「静かにつて？」

「父さんは仕事中なので」

「あ、なるほど」

レオンは頷いた。鍛冶仕事の邪魔をしないでくれという意味だろう。

それを見て、少女は扉を開けた。重そうな扉に見えたが、少女はそれを軽々と開ける。

中はまさに鍛冶場そのものだった。それも、レオンの村の物とは比べものにならないほどの広さである。一番奥に炉があつて、鍛冶台が3カ所。他の場所には、注文された物なのか、金属製品が所狭しと並べられている。鎧や剣といった物はもちろん、鎌や鍬といった農具もある。

その鍛冶台の一カ所では、男性がまさに鍛冶作業中といった様子だった。剣か何かだろうが、細長い金属を炉に入れて軟らかくしてから、鍛冶台に移して叩く。しばらくして、それをまた炉に戻すといった作業をしている。

レオンはその流れるような作業にしばらく見入っていたが、少女がいつの間にか室内に入っているのを見て、慌てて自分も中に入った。

服が汚れると忠告されていたが、恐らくそれは避けようがないだろうと思われた。目に見えるくらいの煤が宙を舞っているのが見える。

レオンが室内に入ったのを確認してから、少女は作業中の父親に声をかけた。

「父さん」

すると、男は手を止めてこちらを見る。

レオンが想像していたよりも、ずっと小柄な男性だった。少なくとも、ガレットさんに比べたら子供のようなものだろう。だが、身体は引き締まっているし、腕も十分逞しい。鍛冶職人としての風格は十分にあつた。

男はしばらくレオンをじつと見つめる。見えているのかいないのか、分からないくらい細い目である。ついでに言うと、髪が全くない。ベティと少女が同じ年くらいだろうから、この男性とガレットさんも、その年代は変わらないはずだが、まだ毛がふさふさのガレットさんに比べると、この男性はだいぶ老けて見えた。

しばらくレオンの身体を観察した男性は、ふっと視線を少女に移し、そして再び作業に戻ってしまった。

何だっただんだろうと思っていると、少女が突然こう言った。

「もう終わり」

「・・・はい？」

「出ましょう」

少女はスタスタと歩いて、扉から出て行ってしまった。

仕方なく、レオンもそれについて行く。

そのまま階段を上ろうとする少女を追いかけながら、レオンは聞いた。

「あの・・・今のは何だっただんですか？」

少女は振り返りもせず answers。

「父さんはあれで大抵の事が分かるの。武器は5日くらい。鎧は2週間くらいで出来ると思う。だから心配しないで」

「心配っていうか・・・例えば何が分かるんですか？」

見ただけで、何が分かるというのか。

「身体とか靴のサイズとか、手の大きさとか、あと、使いこなせる武器とかも」

「・・・どうしてそんな事が分かるんですか？」

「プロだから」

そんなにプロって凄いのか。

「でも、使いこなせる武器なんて、自分でもよく分かりませんけど」
レオンは村にいた時に、剣や弓に一通り慣れるくらいの訓練はしたが、専門家がいたわけではないので、まだ初心者くらいの腕しかない。

「体つきでいたい分かるんじゃない？私も詳しくは知らないけど」
もしかしたら、適当なのかもしれない。

レオンはちよつと心配になったが、よく考えたら、武器や鎧を仕立ててくれるだけでも十分恵まれた話である。ここであれこれ注文するのも、おこがましいだろう。

そう納得した頃に、少女が階段を上りきって扉を開ける。

そこでレオンは初めて気づいた。

小屋の中から男性の声がする。もしかして、お客さんだろうか。

レオンも階段を上りきって室内を覗いてみると、やはり男性がいた。

彼はすぐにこちらに気づいたようだ。

「あれ？見ない顔だね。お客さん？」

彼が聞いているのは、ベティではない少女の方である。だが、答えたのはベティだった。

「そう。今日来た冒険者見習いなんだ。だから、そのうちラッセルのところにも行くと思うよ」

「ああ、そうなんだ」

そこで、ラッセルと呼ばれた青年は納得したように微笑んだ。背が高いが、濃い瞳と髪をしていて、真面目で誠実そうな青年である。

彼は黄土色のエプロンをしていて、両手でやっと思持てるくらいの大
きさの木箱を抱えていた。

「それ、注文してたやつ？」

聞いたのは明るい髪の少女である。

青年は嬉しそうな表情で答える。

「そうなんだよ。やっと思届いたから、すぐに持ってきたんだ。ずつ
と待たせてたから、申し訳がなくて・・・とにかく、中身を確認し
てくれる？」

そう言つて、ラッセルは木箱を少女の前の床に置いた。少女はす
ぐに蓋を開けて中身を調べ始める。中に入っていたのは鉱石の様だ
った。だが、鉄とか銅というわけではなさそうだし、明らかに精錬
前である。そのままでは使えないはずだから、自分達で精錬するの
だろうか。

ラッセルはそんな少女をしばらく見てから、レオンの方を向いた。
「僕はラッセル。冒険者向けの道具屋をしてるんだ。ダンジョンに
挑戦する頃になったら、いろいろ道具が必要になると思うから、そ
の時にはよろしく」

すごく話しやすそうな人だった。

「僕はレオンです。その時はよろしくお願いします」

「ラッセルは店長なんだよー。それも、結構やり手な」

ベティの言葉に、レオンは驚いた。レオンとそう変わらない歳に
見える。少なくとも、20歳は越えていないはずだ。

ラッセルは照れたように頭の後ろに手をやる。

「やり手ってほどでもないけど・・・前の店長だったお爺さんが引
退したから、成り行きで僕が店長なだけで、そんなに腕があるわけ
じゃないんだ。僕が作った店じゃないからね」

「でもさー、仕入れ代行みたいな事まで始めてるし。それって、な
かなか才能がないと出来ないと思うなー」

「それだつて、お爺さんのコネがあったからだしね。道具屋という
よりは、便利屋みたいなものだと思つて貰えればいいよ。レオン君

も何か特定の素材が欲しくなったら、僕に言ってくれば都合出来るかもしれないから、その時はよろしく。もつとも、そこまでギルドは面倒みてくれないから、取り寄せた素材はタダではないけどね」

そこで、鉱石を調べていた少女が木箱の蓋を閉めた。

「うん。これならたぶんいける」

ラッセルがすぐにそちらを向いた。

「よかった。じゃあ、下まで運んでおくよ」

「いいよ。こんな重い物持って階段で転んだら、怪我じゃ済まないかもしれない。そんな事をお得様にさせられないよ」

ラッセルはそう言って、木箱を持ち上げた。そのまま奥のドアに向かい、それを足で開けて、ドアの向こうに消えていった。それを後ろから少女が追っていく。

どういうわけか、それを見届けたベティがクスクスと笑い出した。

「・・・どうかしたんですか？」

レオンが聞くと、ベティは意味ありげに微笑む。

「ラッセルも、なかなか頑張るよねー」

「え？まあ、仕事頑張ってますけど」

「そうじゃなくてさー・・・レオンは、リディアの事どう思う？」

リディアという名前に心当たりがなかった。

「誰ですか？」

「あ、まだ言ってなかった？さっきまでいたのが、ジェフさんの娘のリディア。ここの受付と、あと、細かい装飾品とか作ってるんだ」

明るい髪と瞳をした、中性的な顔立ちの少女。彼女の名前がリディアという事らしい。物言いがつつけんどんな感じだが、それが格好いいと思わせる不思議な印象の少女だった。細かい装飾品とは、アクセサリーとかの事だろうか。

「へえ・・・そのリディアさんがどうかしたんですか？」

「だから、レオンはリディアの事、どう思った？」

「どうって言われても・・・なんとなく格好いい人ですね」

レオンがそう言うと、ベティが何度か頷いた。

「そうそう。まあ、そういう事なんだ」

「・・・どういう事ですか？」

「だいたい分かるでしょー？」

「全然分かりませんけど」

その言葉に、ベティが苦笑する。珍しい表情だった。

「レオンはさあ・・・」

「はい？」

「人生の楽しみを、半分くらい損してると思うな」

レオンはその言葉に首を捻るばかりだった。

伝える者達

通されたのは、立派な調度品でいっぱいの部屋だった。

ベティの案内で次にやってきたのは、とある民家だった。民家と言っても、お屋敷と言ってもいいほど立派な建物である。綺麗に整えられた庭の周りを、高い柵が囲っている。入り口にも、家紋らしきものが彫られた門が設えてある。広さはそれほどでもないという事だが、それを補って余りあるほどの風格がその家にはあった。

その応接間らしき一室。初めて座るソファという物の感触に多少戸惑いながらも、レオンにはもつと気になる事があった。

自分の隣に座っているベティが、口元とお腹を押さえて身悶えているからである。しかし、彼女は別に、体調が悪いわけではない。ただ、笑いを堪えているだけなのだ。

その原因は、レオンの正面に座っている老人にあった。

立派な白髭を蓄えたお爺さんである。ただ、顔にはしわが深く刻まれているし、目蓋もほとんど上がっていないように見える。さきほど見てきた鍛冶師のジェフさんよりも明らかに年上の、真正正銘の老人である。この部屋に入ってくる時も杖をついてたし、非常にゆっくりとした足取りだった。座っている今も、かなり腰の曲がった前傾姿勢だ。

だが、ベティの笑いのツボにはまったのは、そのお爺さんの頭である。

きつと既に髪がないのだろう。そんな曖昧な表現になってしまうのは、その頭を占拠している生物、いや、妖精がいるからだった。

歳経た木の幹のような焦げ茶色の毛。その中から、木の葉のような深緑の瞳がふたつ、ぱつちりと開かれてこちらを見ている。老人の頭の上で腹這いになっているが、眠っているわけではないようだ。

なんとなくだが、レオンにも、ベティが言わんとする事は分かった。つまり、お爺さんの頭上のカーバンクルが、ちょうどお爺さんの髪の毛みたいに見えるという状況。偶然なのか、故意なのかは分からないが、この奇跡的なフィット感。それでいて、その奇跡を全く意に介した様子のない、老人と妖精の堂々たる役者振り。レオンはそれほどではないが、確かにユニークな絵だとは言える。

それでも、本人を目の前にして、中々そこまで笑えるものではない。幸い、お爺さんは気にする様子はないが、もしかしたら見えていないだけかもしれない。その事が、さらにベティの笑いを誘っているのかもしれないが。

まだ笑いを堪えているうちはいいが、そのうち大声で笑い出すのではないかと、レオンはひやひやしていた。

そこで、部屋に少女が入ってくる。お盆の上に、ティーカップが4つ。紅茶のようだった。

「面白いでしょう?」

レオンの前にカップを置きながら、少女が言った。一点の曇りもない笑顔だった。

「え? あ、いや・・・」

何の事ですかとも、そうですねとも答えにくい質問だった。かといって、そんな事ないですよと答えるのも、隣で身悶えている少女のせいで説得力がない。

レオンが答えあぐねていると、少女が老人の隣に腰掛ける。ごく洗練された座り方だった。育ちがいいとはこの事かと思い知る。

レオンは自然と背筋を伸ばした。

「お楽にして下さい。いいんですよ。ベティくらい横になって貰っても」

実際、ベティはソファの背にもたれ掛かるようにして横を向いている。寝転がっていると言っても過言ではない。だが、さすがにそこまでリラックス出来なかった。というか、リラックスとはまた別の問題だ。単に笑い顔を隠しているだけである。

「いえ、それはちよつと・・・」

「冒険者さんともなると、普段から気を抜かないものなのですか？」

「まだ見習いなので分かりませんが・・・とりあえず、僕は大丈夫です」

「そうですか・・・でもご遠慮はなさらないで下さいね」

少女は微笑む。その微笑みも、ベティの屈託のない笑みとは少し違う。どこか抑制された、品格を感じさせる表情だ。

とりあえず、笑いから抜け出せないベティは放っておく事にして、レオンは話を切り出す事にした。

「あの、僕はレオンと言います。今日、見習い冒険者になったばかりです。よろしく願います」

「私はデイジーです。こちらが祖父のフレデリック。よろしく願います」

デイジーが少しだけ頭を下げる。もの凄く優雅な動きだった。田舎者のレオンは、こういった所作に全く免疫がない。否応なくそわそわしたし、そして、ドキドキした。

これが本物のお嬢様なんだ。

所作もさる事ながら、彼女は見た目でも、落ち着きと洗練さを兼ね備えていた。ほぼ黒髪と言えるほどの濃いダークブラウンの髪は、艶やかに真っ直ぐ腰まで伸びていて、前髪も綺麗に切り揃えられている。派手さはないものの、小さく整った顔立ちをしていて、華奢な肢体を象牙色のワンピースが包んでいる。一輪の花という表現がぴったりの、慎ましい可憐な少女だった。

レオンもちろん綺麗な人だと思ったが、それよりも、自分が場違いみたいで気が引けた。彼女自体は綺麗な花でも、それを育てあげた環境を連想してしまう。彼女の洗練された所作が、彼女の後ろ盾を否応なく思い出させるのだ。

彼女に見入ってしまいそうになっていたレオンは、なんとかそれを振り払った。今日の目的はとりあえず顔を見せておくというもの

だったが、もちろんお見合いではない。冒険者見習いとしての訪問である。そして、レオンには聞いておきたい事があった。

「あの、デイジーさん。こんな事聞くのもおかしい話かもしれないんですけど・・・」

レオンはその質問をデイジーにする事にした。本当はお爺さんの方がいいのかもしれないが、彼女の方が話しやすそうだったからである。

「何でしょうか」

デイジーの黒い瞳が瞬く。何か引き込まれてしまいそうで、レオンは直視出来なかった。

「伝承者っていうのは何なんでしょうか？僕、そういった事を全然知らないで・・・」

「あ、いえ。知らない方も、たまにいらつしゃいますよ」

そう言つてデイジーは微笑む。レオンは少し気が楽になった。

「簡単に言つと、伝承者というのは、伝説の冒険者の記憶を伝える人達の事です。偉大な事を成し得た方々が培った知識や経験を、今を生きる冒険者達に授ける事。それが伝承者の仕事です」

「記憶という事は・・・つまり、伝説になった人達が前世だったという事ですか？」

「そうです」

あまりにあつさりとした答えに、レオンはいまいち驚けなかった。

「・・・それって、凄い事ですよね？」

「凄いと言いますか、珍しい事だとは思いますが」

「いえ、だって・・・という事は、デイジーさんも、前世は伝説だったという事ですか？」

その言葉に、デイジーは笑つて首を振った。

「私ではありません。祖父です」

レオンはそちらを見た。

なんというか、どう見ても普通のお爺さんだった。だけど、伝説の冒険者が前世という事は、もしかして、若い頃は名のある冒険者

だったのだろうか。

表情から読みとれたのか、デイジーが説明する。

「祖父が冒険者だった事は一度もありません。武器の訓練所等で冒険者に関わってはいましたけれど、どちらかというと、ずっと裏方の仕事をしていたそうです」

「そうなんですか？ちよつと、もったいないような・・・」

冒険者になっていれば、それこそ偉大な功績が残せていたのではないだろうか。そう思っただけの発言だったのだが、フレデリックさんは全く微動だにしない。

そんなレオンを見て、デイジーはまた小さく首を振った。

「祖父は、これが自分のなすべき仕事だと思っていたそうです。そして、今思い返してみても、自分の選択は正しかったと思っているそうです。自分が冒険者になっても、きっと大成出来なかった。それでは自分の役目を果たせなかったと・・・これは、祖父の口癖です」

「役目ですか？」

「つまり、自分の経験を伝えたい、後輩を指導したいという思いが強かったという事ではないでしょうか。レオンさんは、ソードマスターの話聞いた事はありませんか？」

ソードマスターも伝説となった冒険者の1人だ。レオンもその称号はもちろん知っていたが、具体的な事はほとんど知らない。詳しい逸話を知っているのは、レオンの故郷の村が出身であると言われる、サイレントコールドこと、イブという名前の女性についてのみである。

「いえ、全然・・・称号を聞いた事はもちろんありますけど」

「ソードマスターは、その称号の通り、比類無き剣技を誇ったとされる冒険者です。しかも、それが大剣でも細剣でも、例え初めて握った剣であっても、自由自在に扱う事が出来たとか」

「へえ・・・」

凄い事だとは分かったが、あまり実感がわかなかった。まだ剣の

技術でそれほど苦勞した経験がないからだろうか。

「そんな彼ですが、非常に子供好きだった事でも知られています。彼が冒険者になったのも、身よりのない子供達に孤児院を作る為だったそうです。そこで自分が剣を教えて、冒険者として独り立ちさせる。そんな計画だったのですが、資金が集まって、孤児院を建てる話がまとまった矢先、彼は姿を消してしまったのです」

「え……どうしてですか？」

「そこで彼は最後の戦いに向かったのだらうと、そして彼は帰ってこられなかったのだらうと言われています。事実、その時期には天災が多発していたのですが、彼がいなくなった翌年から、ぱったりとやんでいるのです。つまり、天災に匹敵するような強大なモンスターと戦って、相打ちになったのではないかと……そして、自分がいなくなってもいいように、孤児院の話だけはまとめておいたのではないかと、そう言われています」

応接間に沈黙が満ちた。

まるで知らないその伝説の人物について、レオンは想像でしか触れる事が出来ない。彼は最後の戦いに向かう時、どんな心境だったのか。もう戻って来れないと分かっていたのだろうか。そんな強い敵を倒せた事ももちろんだが、自分がいなくなった後の事まで考えていた。今の自分には遠すぎて見えないような強さだ。

デイジーは微笑んだ。この静かな空気にも全く水を差さない、淑やかな笑みだ。

「祖父の記憶のほとんどは、子供達との思い出なんだそうです。ですから、戦うのは自分の役目じゃない。自分の役目は教える事だって……」

「……そうですね。すみませんでした。もったいないなんて言うて」

十分立派な役目なのだ。その価値を昔の自分が教えてくれたのだから、なおさら無視は出来ない。

レオンはフレデリックさんに頭を下げる。お爺さんは愉快そうに

少しだけ笑った。弱々しい笑い方だが、十分優しさも感じられる。頭上のカーバンクルは、その深緑の双眸で、じっとこちらを見つめていた。

「それに、ソードマスターの記憶を受け継いでいる人は祖父だけではありません。ですから、どなたか他の記憶をお持ちの方が、立派な冒険者になっておられるのではないのでしょうか」

それは確かにそうなのだ。偉大な人物の記憶ほど、多くの人に分化して伝えられる。何を隠そう、レオンの母親も、サイレントコールドの記憶を持っていると言っていた。

そこでレオンは気付いた。

もしかして、自分の母親も伝承者だったのだろうか。仕事としては、ただの主婦というか、農家だったわけだが、その資格があったという事なのだろうか。

「すみません。伝承者っていうのは、伝説の冒険者の記憶を持っている人って事ですか？」

デイジーは少し首を傾げる。

「どうでしょうか・・・そういう方ばかりとは限らないと思いますけれど」

「えっと・・・もう少し詳しく説明していただけませんか？」

「もしかして、どなたか記憶をお持ちの方に心当たりがあるのですか？」

思ったより勘がいい。レオンはその洞察力に驚く。

それだけで、ばれてしまったようだ。デイジーは口元に手を当てて、少し笑った。特にやましい事があったわけではないが、レオンは気まずくなる。

「一応ですが、ギルドから伝承者として認められるには条件があるんです」

「あ、ギルドに認めて貰わないといけないんですね」

「そうですよ。だって、お仕事ですから」

全くの正論だった。自分で名乗るだけでお金が貰えるわけがない。

「すみません。僕、田舎者なので・・・」

デイジーはクスツと笑う。上品さの為か、嫌らしさが全くない。

「ギルドの条件は3つです。1つ目は、16歳以上である事。2つ目は、ギルドで面接試験を受けて、それに合格する事。つまり、そこで冒険者の助力になり得る人がどうか、見極めるのだと思います。そして、3つ目は・・・」

そこで祖父の頭に目をやる。

「カーバンクルと共にある事です」

レオンは驚いた。カーバンクルが何かの役に立つのだろうか。

そこでふと、ギルドでの会話を思い出す。

「もしかして、何かの記憶を伝えてくれるとか、そういう事ですか？」

ギルドにおけるカーバンクルは、志願者の前世を読みとって、それを受付の女性に伝える役目を果たしていた。だったら、逆の使い方も出来るのだろうか。

デイジーは頷いて肯定する。

「必要だと判断すれば、この子はソードマスターの記憶を直接レオンさんに見せてくれます。それがレオンさんの悩みを解消するきっかけになったり、場合によっては、突然剣の腕が上達する事もあります。伝説となった人の記憶を伝える。それが伝承者の仕事です」

「へえ・・・」

ようやくレオンにも伝承者の役割が分かった。要は、先人に話を聞きにいくという感じだろうか。その道で伝説となった人にアドバイスを貰いにいく。それがただの言葉ではなくて、直接見る事が出来るものならば、確かな価値があるのではないだろうか。

「それに、すぐ隣に武器の訓練所もあります。今はギルドのものですから、レオンさんも使っていただけます。遠慮なく使って下さい」

「あ、はい・・・お世話になります」

そういえば、フレデリックさんは、若い頃に武器の訓練所に関わっていたという事だった。このお屋敷の隣にある建物がきつとそう

なのだろう。

レオンは閃いた。

「もしかして・・・例の孤児院っていうのが、それですか？」

何の根拠もない思いつきである。口にした途端に、自分でも、どうしてそんな事を思い付いたのか不思議になった。

デイジーは驚いた表情を見せたが、すぐに微笑んで、首を横に振った。

「違います。ソードマスターが生きていたのは、この町が出来るより、ずっと前ですから」

「そうですか・・・そうですよね」

「でも、同じかもしれませんね」

「え？」

祖父を見ながら、デイジーは優しく微笑んだ。

「ソードマスターの記憶があつたから、祖父が携わつたのです。彼が建てた孤児院も、祖父が大きくした訓練場も、同じ思いで出来たものです。だから、同じかもしれません」

少し前とは違う静寂。

暖かくて、ずっと居たくなるような、心地よさが満ちる。

レオンも、大昔の伝説の男性に思いを馳せる。

皆が持つている前世というものの重みが、ほんの少し分かったような気がした。どういうわけか、自分にはそれが無いわけだが、特に困った事はなかった。だけど、今、ほんの少しだけ、羨ましいと思つた。

この町の歴史よりも長い時間を経ても、伝わってきた物。

「・・・そろそろ帰ります。大事なお話をありがとうございました」
レオンが腰を上げようとする。いい加減帰らないと、日が暮れてしまう。まだ行くところが他にもあるのだ。

それをデイジーが止めた。

「もうちょっと、待ってあげたらいかがですか？」

「はい？待つつて・・・」

レオンは自分の隣を見た。

そして、呆れた。

妙に静かだとは思っていたのだ。

ベティはいつの間にか、ソファの上で寝息を立てていた。

正体不明

「いやー。ごめんごめん」

「いえ、まあ・・・起きて貰えてなによりです」

あまり悪びれた様子のないベティに、レオンはその言葉を返すのがやっとだった。

ソファの上で眠りこけていたベティを起こすのに、レオンは予想外の苦勞をさせられた。最初は普通に声をかけてみたのだが、全く反応がない。仕方ないので、肩を揺すってみたのだが、それでもダメだった。そこで、最終手段として、頬を叩いてみる事にした。叩くと言っても、そんなに強く叩いたわけではない。顔に少し違和感がある程度でも、気になって起きるだろうという目論見だった。

だが、ベティの反応は過剰防衛以外の何者でもなかった。

「私も油断してたなー。まさか、会った初日に、しかも他人の家で、レオンに襲われるとは思わなかった」

さらっととんでもない事を言うので、レオンは周囲を気にしたが、幸い誰もいなかった。裏路地と言ってもいいようなところだから、人通りは少ない。

日も少し陰り始めている。

「襲ってません。人聞きが悪い事を言わないで下さい」

どちらかというと、襲われたのはレオンの方だったが、もう指摘する気力もない。

そんなレオンの主張を聞いているのかいないのか、ベティは両の拳を打ち合わせながら、何度か頷いて言った。

「でも、バッチリ迎撃したし。うんうん。さすがにお父さん仕込みなだけはあるなー。スカートじゃなかったら、もう一発蹴りが増えて、6連コンボだったのに」

「・・・是非毎日スカートにして下さい」

「レオンはスカートが好きなのー？」

「何でそんな話になるんですか。被害縮小の為です」

「でも、もし本気で襲われてたら、私、スカートでも蹴りは出すよ？というか、それでもし中を見られたら、見た物を忘れるまで徹底的にやるから、うーん・・・どっちがいいんだろうね？」

どっちにしろ、蹴りが出る事は避けられないらしい。

レオンは溜息を吐く。

「・・・というか、僕が襲ってないと分かっているながら、5回も攻撃してきたんですか？」

その指摘に、ベティは真顔で頷いた。

「見習い冒険者なんでしょー？あれくらい普通に避けられないと」

出だしの裏拳を貰った時点で、見習い冒険者としては残念な感じだが、その後の、眉間を狙いにきた右手の突きと、それを必死に避けたあとに、胸ぐらを掴んできたのはすぐに弾いた。だけど、その後の牽制のビンタにお膳立てされた、左のアップパーは避けられなかった。この後に、ズボンだったら蹴りがお見舞いされていたようだが、もし出ていけば、恐らく綺麗に入っていただろう。

つまり、レオンから見て、2勝3敗。蹴りがあつたなら、2勝4敗。

しかも女の子相手に。

情けないと言われても、全く反論出来なかった。

落ち込んだ様子のレオンを一応心配してくれたのか、あっけらかんとした様子で、ベティが肩を叩いてくる。

「まあまあ。冒険者もいろいろあるし、多少弱くてもなんとかなるって。これから強くなればいいんだから」

「・・・そうですね」

「そうだ。レオンはスニークの事知ってる？」

スニークも伝説の冒険者の称号である。この町に来る荷馬車の中でも、名前が出た人だ。

「えっと、称号くらいは」

「あの人も最初は弱かったんだって。というか、女の子だったって噂だし」

「確か、本当の名前を誰も知らなかったって人ですよね？」

「そうそう。名前どころか、性別とか年齢も分からなかったって。変装の達人だったっていうしねー。ずっと正体を隠してたから、どんな事してたのかとか、いつ死んだのかとかも分からないんだって」

「・・・そんな人が伝説に残るような事をしたって、どうして分かったんですか？」

「あ、ここだよー」

ベティがまたもやレオンの質問を無視して立ち止まった。本日2回目だ。このマイペースぶりに、既に慣れ始めている自分に驚きだった。

今度も立派な民家だが、フレデリックさんの家ほどではない。木造平屋だが、そこそこの広さがある。ユースアイでは、これが平均的な民家のようなだ。今日だけでも結構町の中をうろろしたが、だいたいこれくらいの民家が多い。それか、もう少し狭い代わりに二階建てか。ガレットさんの酒場や、フレデリックさんのお屋敷は別格である。この家も、広い庭があつて、ガレージのような物が建っているから、もしかしたら裕福な方なのかもしれない。

ベティは躊躇う様子もなく、勝手に敷地内に入っていく。仕方ないので、レオンもその後続いた。

ところが、彼女が向かったのは家の方ではなく、ガレージの方だった。

その扉の前に来たところで、レオンは尋ねた。

「こんな所に、伝承者がいるんですか？」

もう1人伝承者に会いに行くのは知っていた。だけど、それ以外の事は何も聞いていなかったのだ。

「うん。大抵こっちにいるんだー。ここがニコルの部屋みたいなも

のかな」

「へえ・・・」

広さはともかく、あまり住み心地がよさそうな建物ではなかった。特に、冬は凍えそう。隙間風が吹きそうなくらいだから、この時期でも、きつと朝晩は寒いだろう。同じ伝承者であるフレデリックさんと比べると、生活にかなりの差があるように思えた。

ガレージからは、何か、カチャカチャという小さい物音がする。

「レオン」

「はい？」

「ちよつと、ノックしてみて」

ガレージのドアをノックしろという意味らしい。入り口には、窓のついたドアがあるのだが、その窓には張り紙でもしてあるのか、室内を窺う事は出来ない。

「・・・僕がですか？」

今まで、止める間もなく、何でも自分でやってきたベティだけに、急にそんな簡単な事を頼むのは違和感があった。

ベティは微笑みながら言った。

「いいからいいから。とにかくやってみて」

「別にいいですけど、何で急に・・・」

「今度からはレオン1人で来るわけでしょう？ だったら、慣れておいた方がいいと思うな」

「慣れないといけないような事があるって事ですか・・・」

多少うんざりしながらも、レオンはドアの前まで進み出る。ドアをノックしたくらいで、何か起こると思えない。だけど、妙な緊張感が、レオンの身体を包んだ。

呼吸を整える。

そして、軽くドアを叩いた。

その直後だった。

子供の悲鳴。何かの金属製品が崩落したような物音。どちらもガレージ内からだった。

自分のノックなど、軽く音が出る程度である。思いもよらぬ過剰反応に、レオン自身が一番戸惑った。

すぐにドアが開く。

その向こうにいたのは、まさしく子供だった。性別ははっきりしないが、身体つきから言っても、レオンより年上という事はある。レオンは16歳ながら小柄な方である。そのレオンより明らかに小柄だから、恐らく12歳くらいだろうか。その小柄な身体を、グレイのシャツとモスグリーンの膝丈のズボンで包んでいる。子供らしいファッションだった。

だが、一番の注目点は、その子供が、両手を目元に当ててしゃくりあげている事だった。

どう見ても泣いている。

「泣かしたー」

背後から、これ以上ないくらい無責任な声が飛んでくる。振り返ると、ベティの悪魔的な微笑みが目に飛び込んできた。

「え？いや、その・・・」

泣かせるつもりはなかったし、泣かせるような事をした覚えもない。だけど、もしかしたら、本当に自分のせいなのだろうか。

レオンはもう一度子供の方を見た。

よく分からないけれど、とにかく可哀想だった。見ていて、気の毒な気分になる。

とりあえず、謝ろう。

「えっと・・・その、ごめんね」

なるべく優しく言ったが、効果はない。子供はやや俯いたまま、すすり泣くだけである。

まさに途方に暮れた。

泣いている原因も分からないし、どうやったら泣き止むかも分からない。

レオンはまた振り向いた。ベティに助けを求めたのだ。

困り果てたレオンの表情を見て満足したのか、ベティが意味あり

げに頷く。そして、子供の方を向いて、やや大きな声で言った。

「ニコルー。仕事だよー」

その言葉に、レオンは意表を突かれた。確か、ニコルというのは、ここに住む伝承者の名前のはずだ。だけど、フレデリックさんの孫のデイジーが言うには、伝承者になるには16歳以上でないといけないはずである。だから、きつとこの子はニコルという人物とは別人だと思っていたのだが。

レオンは子供の方に視線を戻す。
びっくりした。

ニコルと呼ばれた子供が、レオンの目の前で目を輝かせていたからだ。

「近!？」

いつの間に寄ってきたのか。というか、さっきまで泣いていたのはなんだったのか。

ニコルの目は、全く赤くなっていない。髪は濃い色だが、瞳は明るいブラウンだった。子供らしい、大きな瞳だ。

「本当に!？仕事って事は冒険者見習いだよね?うわあ!凄い!ねえ、どこから来たの?ジーニアス?それともアスリート?なんかあんまり強くなさそうだけど、うん、でも、これくらいの方がいいなあ。ちよつと弱いくらいの方が工夫しがいがあるし。僕、ニコルって言うんだ。僕のところに来たって事は、伝承者の仕事だよな?うわあ……。やった!嬉しい!もう何でも聞いてね!特に、鍵開けとか、そういう細かい作業なら、もうなんでも!あと、ちよつとした仕掛けだね。そういうの、ガジェットって言うんだけど知ってる?ここにもいっぱいあるんだ。君も絶対気に入ると思うよ!どうどう?見ていかない?見ていかない?」

いつの間にか、右手を両手で包み込まれていた。

レオンはゆつくりとベティの方を振り返る。

「……だいたい分かりました」

おおよその事は、ニコル本人の口から暴露されていた。

ベティは少し笑いを堪えながら言った。

「良かったねー、ニコル。これからはレオンが実験に付き合ってくれるから」

「そうだよね・・・うわあ！ダンジョンで試せるなんて、楽しみ！」

「いや、試すって、僕はまだ・・・」

レオンの言葉をニコルが遮る。

「あ、そうか。もしかして、まだ成り立て？」

「え？あ、うん」

「そっか・・・うんうん。でも大丈夫。楽しみは後にとっておかないとね！」

それはいったい何が大丈夫なのだろう。とりあえず、レオンの安全を保証しているわけではなさそうだ。

「じゃあとりあえず、僕の作った物を見ていつてよ。なんなら、実際に・・・」

「あー、ゴメン。ニコル」

そこで割り込んだのは、意外にもベティだった。

「レオンは他にも行くとこあるから、また今度でいいかなー？出来たら今日中に回っておきたいんだよね」

そんな話は聞いていなかったレオンだったが、何も言わない事にした。ベティの表情が、いつもとさほど変わらないながらも、目元が真剣に見えたからだった。

ニコルは残念そうな表情を顔いっぱい浮かべたが、すぐに頷いた。

「仕方ないね。じゃあ、えっと・・・レオンだったっけ？また今度おいでよ。いろいろ用意しておくから」

「あ、うん・・・また今度、よろしくお願いします」

レオンが軽く頭を下げると、ニコルは笑顔に戻って、ガレージの中に戻っていった。

ドアが閉められ、辺りは静かになる。

それを見届けてから、レオンは息を吐いた。何もしていないが、

何か終わったという達成感があつた。

振り返ってみると、ベティは既に帰り道を歩き出していた。

慌ててレオンもそれを追いかける。敷地から出た辺りで彼女に追いついた。

「他に行く場所なんてあるんですか？」

開口一番にそれを聞くと、ベティは口だけで微笑んだ。珍しい表情だった。

「ないよー」

「じゃあ、どうして嘘を言ったんです？」

「レオンはまだ心の準備が出来てないから」

「僕ですか？」

ベティは前を向いた。その横顔は、いつもの彼女よりも大人びて見える。そのギャップにレオンは驚き、そして、一度大きい鼓動が聞こえた。

「ニコルは悪い子じゃないんだけど・・・うーん、いや、違うな。」

ニコルは悪い子なんだよ」

あまりにもあっさりと言い切ったので、レオンは一瞬思考停止した。

「・・・えつと、ニコルさんって、さっきの子の事ですよ？普通の子供に見えましたけど」

「そうなんだけどねー。なんていうのかな、ニコルは悪戯っ子なんだ」

「悪戯っ子ですか？それって、そんなに珍しい事じゃないような・・・」

ある程度の悪ふざけは、子供なら誰だつてするだろう。

「あの子はちよつと違うんだ。なんていうのかな・・・ニコルは自分がした事が悪い事だつて分からない子なんだよね。私はニコルじゃないから、本当はどう思ってるのかは分からないけど」

「僕はもつと分かりませんけど・・・それが僕とどう関係するんですか？」

ベティはこちらを向いた。優しい微笑み。これもまた珍しい表情だ。

「私はね・・・ううん、私達は、つまり、今日レオンが会った人みんなだけど、ニコルの事が嫌いなわけじゃないんだ」

レオンは黙って頷く。

「だからね、レオンにも嫌いになって欲しくないなーって、思っただけなんだ。ちゃんと準備してからじゃないと、初対面の人に一瞬で嫌われるような、そんな子だから」

その理屈は分からないでもない。

でも、理由としては弱い。

「・・・それだけじゃないと思いますけど、違いますか？」

ベティはまた前を向いた。横顔だけでは、表情は読みとれないが、少し寂しそうに見える。

「私はニコルが嫌いなわけじゃないけど、でも、やっぱりちょっと怖いな」

言葉の最後が少し小さかった。口にするのが嫌だったのかもかもしれない。あるいは、口にするのを躊躇うくらい怖いのだろうか。

それ以上に、ベティの口から怖いという言葉が出てきた事が、驚き以外の何者でもなかった。怖じ気付く事のない、怖いもの知らずの女の子だと思っていたのだ。

その彼女が恐れているのが、何の変哲もない子供。

「昔はね、ニコルと一緒に遊んだりもしたんだよ。だけどね、だんだん遊ばなくなったんだ。本当に、ニコルの事は嫌いじゃないんだよ。だけど、なんとなく一緒にいなくなった。これは、私だけじゃなくて、みんなそうなんだ。そして、最近、やっと理由が分かったんだ。ニコルといるとね、影響されるんだよ」

「影響ですか？」

「私も悪い事が分からなくなってた。ニコルみたいに、社会のルールが見えなくなるんだ。それが怖くなって、ニコルから離れていったんだよ」

「えっと、つまり・・・僕も影響されるかもしれないという事ですか？」

ベティは頷かなかった。

「レオンはニコルにとって初めての仕事なんだ。あの子が伝承者になったのは、つい最近の事だから。初めてだから、何が起きるか分からないんだよ。レオンがどうなるかも分からないし、ニコルがどうなるのかも分からない。だけど、ニコルにしてみたら、今が大きな節目なんじゃないかって思うんだ。だから、なるべく上手いって欲しいって、そう思ってるだけなんだよ」

そこでベティはようやくこちらを向いた。いつもの屈託のない笑みだった。

「もちろん、一応レオンも心配してるんだけどね。でも、多少レオンの根性が曲がった程度の事なら、お父さんがどうにかしてくれるから平気だよ。命の保証は出来ないけどねー」

どこか、言葉に迫力がない。

今の説明を聞いただけでは、レオンには、この町の人達とニコルの関係が分からなかった。嫌われているわけではないが、皆から距離を置かれている。口で言うのは簡単だが、上手く想像できそうもない。

だけど、なんとなく、レオンはベティの様子を見ただけで、どうい感じの話なのかは分かった。もちろん、楽しい話ではない。だが、辛い話かというと、少し違う気がした。

寂しい話というのが、一番しっくり来る。

「・・・分かりました」

「何が？」

「要は、ニコルさんと町の人達が馴染む事が出来ればいいんですよ？」

その言葉に、ベティは少し戸惑ったようだ。

「いや・・・別に、そこまではしなくていいと思うけど。レオンはとりあえず、冒険者になればいいんじゃない？そうすれば、ニコル

の仕事も成功って事になるわけだし」

「いえいえ。町の人達に恩返し出来るかもしれないですし」

「でもなー。1年しかないんだよ？」

「1年でだめなら、もう1年頑張ります」

「そこまではお父さんも面倒見てくれないと思うけど」

「その時は、どこかのお店で働きます」

「・・・なんていうか、本当にそうなってそうで嫌だなー」

ベティは呆れ顔をしてから、それでも、すぐにいつもの微笑みに戻った。

「まあいい。せいぜい頑張れー」

声が低い。どうやら、ガレットさんの物真似らしい。

レオンは笑った。

「さすが親子ですねえ」

「そう？こっこの、ニコルは上手なんだよー。なんといつても、スニークの伝承者だから」

変装の達人のノウハウを生かしているのだろうか。

「へえ・・・というか、スニークの伝承者だったんですか」

「そうだよー。昔から、家の鍵とか普通に針金みたいなので開けてたし。たぶん町中の家の鍵は開けたことあるんじゃないかなー」

当たり前前みたいに言ったが、もちろん一般的な趣味とは言えない。

「いや・・・それ、泥棒ですか？」

「練習してたんだってさ。だから、ニコルの家は鍵穴がないんだよー。なんか、ネジみたいなのを差してドアを固定するんだ。それだったら、ニコルも開けられないから」

自分の子供基準の防犯対策をしているらしい。

「・・・それ、ドアの内側で使うんですよね？じゃあ、出かける時どうするんですか？」

「それは気にしないんじゃない？だって、ニコルは閉まってる鍵にしか興味ないから」

もはや、防犯対策ではなかった。

「・・・出かける時に閉められない鍵って、意味ないですよね？」
「そもそも、泥棒なんて滅多にいないし。それに、ニコルに開けられるって事は、普通の泥棒なら開けられるって事だから」

正論みたいな口調で言ったが、きつと何か間違っているだろう。けれど、これ以上聞くと深みにはまりそうなので、レオンは話題を変える事にした。

「・・・えっと、ニコルさんって、16歳ですか？」

伝承者なら最低16歳。だが、全然そうは見えなかった。何かの特例だろうかと思つての質問である。

だが、ベティはあっさり認めた。

「そうそう」

「本当ですか？なんていうか・・・失礼ですけど、幼く見えますよね」

「見えるねー。全然胸もないし」

全然寝癖がないと言っているのと同じくらいの軽い発言だった。レオンはそこにも深入りしない事にする。

「・・・というか、あの、もっと失礼なんですけど、ニコルさんは女性ですか？」

子供っぽいのもあるだろうが、鍛冶屋で会ったりディアどころではないくらい、見た目では性別が分からなかった。

「私はそう思うけど」

「・・・私は？」

「本人は秘密だつて言ってるからねー。というか、男女どちらの服でも似合うし、変装も上手だし」

「・・・ご両親に聞いてみたりはしないんですか？」

「何か、口止めされてるんだって」

どうしてそこまでして隠すのだろうか。

「一緒にお風呂に入ったりとか、ないんですか？」

「だって・・・もし男だったら恥ずかしいし」

それは確かにその通りだ。

「レオンが入ってみればー？女だったら儲け物でしょー？」

「儲け物って・・・」

「でも、胸がないからダメかー」

ベティは平然と言ったが、さすがにレオンは恥ずかしくなった。

「そういう事を言うのはさすがに・・・」

「あれー。レオンはない方がいいの？」

「違います。変な話をしないで下さい」

当然というべきか、やっぱりベティは止まらなかった。

「やっぱり大きい方がいいでしょ？私よりもデイジーの方が実はあるんだよー」

一瞬デイジーの胸元を思い出そうとした自分に気付いて、慌ててそれを打ち消した。目の前のベティに至っては、首から下を見られそうにない。

レオンはしどろもどろになる。

「いや、そういう事じゃなくて・・・」

「じゃあ、形の問題？それとも触った時の・・・」

「わー！わー！」

耳を押さえながら必死で叫ぶと、ようやくベティも止まってくれた。悪魔的な表情だった。弄ばれていたのは、間違いなさそうだ。

「レオンはさあ・・・」

次は何を言い出すのかと思って、レオンは心の準備をする。

だが、ベティの言葉は、今度こそ正論だった。

「いくら強くなっても、たぶん女の子には勝てないよねー」

思いつきり上半身から力が抜けた。

反論の余地は欠片もない。

「・・・せめてモンスターには勝てるように頑張ります」

不思議なもので、今ならばどんなモンスターにでも立ち向かえる気がしたレオンだった。

プロフェッショナル・アイ

「よし！休憩！」

その一言で、レオンの身体は看板が倒れるみたいに後ろに傾く。地面の衝撃。

固いけど痛くはない。土の匂いが鼻を掠める。

剣と盾を離して大の字になった。

空は青い。

小さな雲。

子供達の歓声。

レオンは深呼吸した。体内の熱い空気を吐き出すと、代わりに外の冷たい空気が入ってくる。

心地良い疲労感。

だが、それとは逆のもやもやしたものが、小さいながらも心の中にはあった。

やっぱり上手くいかない。なんとなく、分かってはいたのだけだ。

小さく息を吐く。先ほどの深呼吸とは違い、心の中のわだかまりを追い出そうとしたが、今度は上手くいかなかった。

レオンがいるのは、この町で一番大きい訓練所である。伝承者をしているフレリックさんが大きくしたという施設だ。場所はそのフレリックさんのお屋敷のすぐ隣。今はギルド所有の建物という事だが、どうやらフレリックさんが、今でも管理人の立場なようだ。

訓練所といっても、レオンのような冒険者見習いは全くいない。むしろ、子供達が剣を習いに来る場所になっているらしい。子供達が20人くらい走り回っても十分過ぎるほどの屋外スペースに、着

替えや休憩の為の小屋が併設されている。小屋といっても、家具さえ揃えれば、1家族が十分暮らせる規模の物だ。その中に、刃を潰した訓練用の武器や、簡易防具が大量に保管されている。

自分の武器と防具が出来上がるまで、レオンはここで戦闘訓練をする事にした。どんな武器が用意されているか分からないというのがなんとも言えないところだが、とりあえず、鍛えておくに越した事はない。

「レオン」

まるで刃のように硬質な男性の声に、レオンは身体を起こす。

その彼が、ちょうどこちらに向かつて水筒を差し出したところだった。お世話になっている酒場のガレットさんが用意してくれた水筒である。小屋の前に置いていたはずだが、わざわざ持ってきてくれたようだ。

「アレンさん。どうもありがとうございます」

水筒を受け取りながら、御礼を言う。そのまま彼は、レオンの正面に座り込んだ。

少し長めの黒い髪。黒い瞳に、鋭い顔の輪郭。だが、彼の一番の特徴は、間違いなくその長身だった。かなり大柄なガレットさんよりもさらに上。彼より背が高い人間を、レオンは見た事がない。体つきは筋骨隆々というほどではないが、それでも鍛え上げられているのが分かる。正確としては、無口というほどではないが、どちらかというと寡黙な人物。頼りになるお兄さんという印象が強い。

それがアレン。彼はこの町の警備の他に、この訓練所の教師をしている。レオンがここを初めて訪ねた時に出迎えてくれたのが彼だった。そもそも教師は数人しかいないようだが、そんな縁もあってレオンの訓練に付き合ってくれているのだ。

「やっぱり上手くいきませんね。村を出る前に、少しは訓練したんですけど」

レオンから話を切り出す。アレンから話しかけてくる事はあまりないから、こちらから話さないと、ずっと沈黙が続くのだ。

アレンは表情を変えずに答える。

「そうでもない。レオンは筋がいい方だと思う」

その評価が、レオンには意外だった。

「・・・でも、僕、未だにアレンさんから一本も取れませんが」
誇張も何もなく、まさしくその通りだった。

この訓練所を訪ねて、今日は3日目である。初日にまず、アレンはレオンの腕がどの程度なのかを見てくれた。レオンが自己評価するなら、やっと剣の振り方を覚えたくらいの腕である。だが、それだけ出来れば十分だという事で、すぐに剣と盾と防具をつけて、アレンさん自ら訓練してくれる事になった。

実践形式というか、決闘形式である。剣の腕もさることながら、体格に結構な差がある。もう何十回と打ち合ったが、未だにレオンの剣が届いた事は一度もなかった。

「そんな簡単に一本取られても困る。それに、一本取って欲しいわけじゃない」

「え？そうなんですか？」

アレンは頷く。

「剣を通して、レオンの事を見せて貰っていただけだ」

「僕の・・・」

「剣は俺の専門分野だ。剣を通してなら、相手の事がほとんど分かる。だから、それに付き合って貰っていただけだ」

「つまり・・・まだ訓練じゃなかったんですか？」

「強いて言うなら、剣を握る前に筋力トレーニングをさせていた。あっちが訓練だ」

確かに、妙に念の入ったトレーニングだとは思っていた。ちょっと騙されていたような感じもするが、自分は初心者なわけだから、それが普通なのかもしれない。

「ただ、あれだけ必死になって一本取ろうとしていた自分は何だったのか。」

空しくなったような、ほっとしたような、複雑な気分で溜息を吐

くと、アレンが唐突に質問してくる。

「レオン。もしかして、狩猟経験が相当あるんじゃないか？」

その指摘にレオンは戸惑いながらも頷く。

「あ、はい。父さんが狩人なので、よくついて行ってたんです。えっと、6歳からだから・・・そういえば10年間になりますね。もちろん、最初は見るだけでしたから、実際に狩りしてたのは、7、8年くらいだと思いますけど」

レオンのいた村では、狩りはとても重要なものだった。食肉を確保する上でももちろんだが、どちらかというと、山の動物達にこちらの縄張りを認識させるための仕事だった。

自然との共生。それがレオンの村の出身である、サイレントコールドことイブ様が大切にしていた教えである。

その答えに、アレンは大きく頷く。

「やはりか。お前の剣はそういう剣だった」

そういう剣と言われても、レオンにはさっぱりだった。

「えっと・・・どういう剣ですか？」

「まず、レオンは実践慣れしていた。普通は、いきなり人間相手に武器を振るうのは躊躇するものだ。相手が傷つくのを想像してしまうから、それを振り払うのには、相当な精神力がいる」

「いや、僕だって、結構躊躇してましたけど」

「確かにそうだが、普通はその程度じゃない。最初に人に相對する時は、誰もがどこかで負けたいと思っているくらいだ。相手よりも自分の剣を恐れる。自分の剣がとれくらい危険な物なのか分からないからだ。どんなに腕がある人間でも、最初は震えて力が出せない。だが、レオンは最初から俺を倒す気でいた。相對した俺なら分かる。レオンの剣は震えていなかった。それはある程度、他の生命を傷つけた事があるからだ」

そう言われると、確かにそうかもしれない。最初は確かに緊張したが、どちらかというと、上手く戦えるか心配していた為だった気がする。

土の上に座ったまま、アレンはこちらをじっと見つめている。

「そして、もうひとつ。レオンは戦士としての戦い方が、全く板に付いていない」

はつきり言われるとやはり残念だが、頷かざるを得ないところだった。

「それはそうですよ。まだほとんど訓練してませんから」

「いや、そうじゃない。レオンの戦い方は柔軟過ぎる」

「え？柔軟ですか？」

そう言われても、自覚はなかった。

「俺が教えている子供達は、ここに初めて来る時は皆真っ白な状態だ。他の戦い方を全く知らない。だから、ある程度教えていると、皆同じ様な戦い方になる。変な言い方だが、教師である俺の戦い方に染まっていくと言ってもいい」

「それはまあ・・・そうかもしれないね」

「だが、レオンの戦い方は、戦士の模範からまるで外れている。剣や盾の使い方は教わったようだが、はつきり言って全く様になっていない。俺には剣と盾が浮いて見えるくらいだ。それは、既にレオンの身体に他の戦い方が染み込んでしまっているからだ。その戦い方に、今日やっと確信が持てた。レオンはまさに狩人の戦い方をしている。大自然の、決して平坦ではない地形で生き抜くための、柔軟で軽快な身のこなし。そんなレオンに重い剣や盾を持たせても、上手くいくわけがない」

真っ直ぐな眼差しで、そう断言されてしまった。

たっぷり数秒間を空けて、レオンは尋ねる。

「えっと・・・それはつまり、僕には戦士が向いてないって事ですか？」

「そうだ」

「・・・あの、僕、一応アスリート志望なんですけど」

剣や盾が使えなければ、それを扱う事が専門であるアスリートにはなれない。

「レオン」

「はい？」

「ついてこい」

アレンが立ち上がりながらそう言うので、レオンも立ち上がる。彼が向かったのは、併設されている小屋の方だった。レオンもその後をついていく。ふと横を向くと、少し離れた場所で、男の子4人が小さなサイズの剣を一生懸命に振っている。なんとなく微笑ましい。デイジーからソードマスターの話を聞いていたからかもしれない。

アレンは小屋の前でレオンを待たせると、自分だけ中に入っていた。

待つこと数分。なんとなく空を見上げる。今日もいい天気だ。しばらくして、アレンが小屋から出てくる。

出てきた彼は、盾を持っていた。だが、さっきレオンが持っていた物よりかなり小さい。ガレット酒場で使われているお盆みたいだと思った。

「これをつける」

その盾を差し出しながら、アレンは言った。

「え・・・これ、つける物なんですか？」

レオンの中で、盾と言えば、手に持つ物である。

その発言を聞いたアレンは、黙ってレオンの左腕を掴んで、盾の裏側中央から伸びているベルトの様な物を巻き付ける。

取り付けられてみると、さっきまで持っていた盾ほどではないが、それでも少し重い。

「バックラーだ」

アレンはそれだけ言った。この盾の名前らしい。

「へえ・・・」

腕を動かしてみるが、思ったよりもしっかり取り付けられているようだ。だが、盾としては、面積が寂しいので心許ない。

「レオン、ひとつ宿題を出しておく」

「え・・・何ですか？」

「両利きになれ」

もの凄く端的な命題だった。

「・・・えっと、両利きってというのは、つまり、両手が利くようになれって事ですか？」

「そうだ」

「それって・・・そんな簡単になれるものですか？」

右利きの生活を既に16年も送ってきたのに、今更直せるものなのだろうか。

「簡単には直らない。だが、その盾を生かす為には必要な事だ。それは両手を空けながら、盾を利用する為の物だ。その方が、両手が使える分、より柔軟に戦える。だが逆に、分かつとは思うが、防御が手薄になる。防御を代償として、機動力と柔軟性を手に入れる。難しい戦い方になるが、レオンの狩人としての経験を生かすためには、これが最善だと思う」

「なるほど・・・」

理論としては分からないでもない。

「でも、両手が使えるとはいっても、具体的にどうしたら・・・」
アレンは頷いた。当然の疑問だったようだ。

「将来的には、二刀流出来るのが望ましい。つまり、左手でも武器を扱えるようになるのが理想だ。だが、とりあえず左手を空けておいても、武器や盾を捨てなくても道具が使えるし、あるいは、盾を捨てなくても弓の補助が出来るようになる。ただ剣を振るうだけではなく、場合によっては、弓や道具を使う。そういう幅広い戦術を意識するといい」

「なんていうか・・・頭を使わないといけませんね」

「そうだ。だが、それが出来ないレオンは生き残れない。レオンはガレットさんの娘のベティと面識はあるか？」

突然その名前が出てきた事に驚いたが、すぐに苦笑して頷いた。

「はい、もちろん。面識があり過ぎて困ってますけど」

面識だけならいいが、過剰なボディランゲージが伴っているのが抜けない。気を抜いたら大怪我をさせられそうな、ある意味で元氣過ぎる女の子である。

アレンはくすりとせぜずに、真顔で頷く。

「彼女も狩人だ」

「え？そうなんですか？」

初めて聞く話だった。よく考えたら、自分の事は大方白状させられたが、彼女の事は何も知らない。

「まだ数年ほだから、レオンよりは経験が浅い。だが、彼女には同僚というか、師匠がいる。元々は彼1人で狩人をしていたんだが、事情があつてベティが手伝うようになった。彼の名前はホレス。聞いた事はないか？」

「あ・・・名前は一度だけ」

この町に來た初日、ベティが口にいるのを聞いた気がする。

「一度彼に会つてみるといい。彼は冒険者ではないが、かなりの腕利きだ。戦い方の参考になるかもしれない」

「あ、なるほど・・・分かりました」

「彼は日によつて居場所が違うが、ベティに言えば案内してくれるだろう」

「・・・そうですか。頑張つてみます」

「どうかしたか？」

「いえ、別に・・・」

何か災難が起こる気がするとは言えなかった。

そこで、2人に近づいてくる人物がいた。

レオンはすぐに氣付く。

「リディアさん」

鍛冶師のジェフさんの娘、リディアである。赤みがかつた茶髪を前と同じ高い位置で束ねている。どこか中性的な顔立ちの中に、明るい瞳が不思議な印象を放っているのは相変わらずだが、珍しく今日はスカート姿だった。珍しいとレオンが評価出来るのは、ベティ

から、リディアはスカートをほとんど穿かないと聞いていたからである。そのためか、以前は格好いい印象が強かったが、今日は一段と女性らしく見えた。

彼女は、布に包まれた大きな箱のような物を小脇に抱えている。

「アレンさん、レオン、こんにちは」

リディアは軽く頭を下げる。レオンだけ呼び捨てなのは、年齢を意識しての事だろう。彼女は17歳。レオンよりも年上なのだ。これも、聞いてもないのにベティが教えてくれた情報である。

「こんにちは。こんな所までお仕事ですか？」

「そう。ベティがここだって、言ってたから」

「もしかして、僕に用事ですか？」

「アレンさんもいるなら、ちょうどよかった。とにかく、はい、これ」

持っていた箱を、両手でレオンに差し出す。

「・・・はいって、何ですか？これ」

リディアは即答した。

「武器」

「・・・僕の武器、箱ですか？」

「中身に決まってるでしょ。開けてみて」

「え？あ、はい・・・」

剣とか槍にしては箱の大きさが小さかったので、中身が想像出来なかった。そもそも、武器をわざわざ箱に入れてこなくてもいい気がする。

布を取ってみると、中身は木箱だった。

その蓋を慎重に開ける。

中に入っていたのは、革の帯。

そして、黒い柄と鉄の刃。

レオンは取り出してみた。

「・・・ナイフですか？」

言葉通りの、それは短剣だった。正式にはダガーと呼ばれる物だ。

長さは30センチもない。箱の中身は、それが3本と、それを腰に下げる為のベルトのようだ。食事用のナイフよりは大きいものの、武器としては小型の物で、しかも軽い。扱いやすいのは間違いないが、威力は心許ない気がする。

だが、手に馴染むのは確かだった。子供の頃から狩りの度に握っていた物とよく似ているのである。思わず懐かしさを覚えたほどだった。鍛冶師のジェフさんが、自分を一目見て勝手に作った物だが、とりあえず、慣れている武器という点では間違いない。さすがの職人の目である。

「これは、投擲用か」

アレンが呟くように言った。

リディアが軽く頷いて答える。

「はい。だから、アレンさんに投げ方を教えて貰った方がいいと思
って」

「いや、投擲は専門じゃない。ホレスが知っていればいいが・・・」
「ホレスさんは接射が上手いですから」

「そうだな。知らない可能性が高い。そうになると・・・」

2人はそこで黙った。

レオンは、そんな2人をキョロキョロと眺める。

「えっと・・・もしかして、教えてくれる人がいないって事ですか？」

アレンとリディアは顔を見合わせた。

「いや、いるにはいる。もの凄い名手が」

「そう。だけど、ちょっと事情があつて・・・」

そこで突然、声が割り込んできた。

「事情って何の事ですか？」

レオンも驚いたが、それ以上に驚いたのは、アレンとリディアの方だった。いつもクールな2人だけに、驚いた顔は珍しい。

声の主の方に3人は注目する。

日傘の影の中にいたのは、長い髪が目を引き、落ち着いた容姿の

少女。3人のリアクションに戸惑っているようだが、それもどこか抑制されていて、育ちの良さを感じさせる。

この訓練所の隣にあるフレデリックさんのお屋敷。そこに住んでいる彼の孫娘。

「あ・・・デイジーさんですか。急に声がしたので驚きました」

レオンが笑いながら言うと、デイジーも微笑みを返す。

「それは失礼をいたしました。何か深刻な話かもしれないと心配になったものですから。この訓練所で、何か足りない物がありますか？」

「いえ、全然。ちょっと、この・・・」

そこでリディアに口を塞がれた。

だが、レオンが両手で持っているのだから、当然気になっただろう。デイジーは自然と箱の中身を見て、そして嬉しそうな声を上げた。

「まあ・・・素晴らしい一品ですね。これはジェフさんの作品ですか？」

聞かれたリディアは、諦めたように息を吐いてから、レオンを解放する。

「そう。お父さんの。バランスは私が調整したけど」

「ジェフさんもリディアもさすがですね。とても綺麗に出来ています」

綺麗かと言われると、確かに綺麗かもしれない。だが、刀身はともかく、柄はただ真っ黒なだけの味気ないデザインだから、女の子の趣味としては微妙なところではある。

だが、デイジーの発言はここで終わらなかった。

「レオンさん。ちょっと、使ってみてもよろしいですか？」

さすがに耳を疑った。

「・・・使えますか？」

その言葉に答える事なく、デイジーは勝手に箱からスローイングダガーを一本抜き取る。それを見て数秒間うつとりしてから、彼女

は重さを確かめるように、短剣を握った右手首をスナップさせる。妙に手慣れてると思った、次の瞬間だった。

デイジーの右手が一閃した。

放たれた短剣は直線を描くように真っ直ぐ飛び、20メートルほど先にあつた木の幹の真ん中に突き刺さる。

完全に玄人の投擲だった。

誰も声が出ない。

デイジーは満足げに微笑むと、リディアの方に向き直る。

「綺麗ですね。本当に美しいバランスです。あれだけ重心がしっかりしていれば、かなり長い間使えるでしょうね」

専門家みたいな感想だった。

今度は、レオンの方を向いた。

「レオンさん。また今度、よかつたら触らせて下さいね。他にも、剣の事なら、何でも聞きにいらして下さい。それでは、私、ここで失礼いたします」

デイジーは優雅に一礼すると、機嫌良さそうに、門の方へと歩いていった。

しばらく、誰も喋らなかつた。

最初に口を開いたのは、アレンである。

「・・・そういえば、そろそろ差し入れを持ってくる時間だった。失念していた」

フレデリックさんが高齢の為か、代わりにデイジーがここまで差し入れを持ってやってくる事が多い。レオンも何度か顔をあわせている。

だが、今更後悔しても遅すぎた。

一応気になったので、レオンは聞いてみる事にした。

「デイジーさんはどうして・・・あんな事が出来るんですか？」

投擲と云えばいいのだが、なんとなく口にするのが憚られた。お嬢様の趣味としては、間違いなく一般的ではないはずだし、趣味程度の腕ではないのがレオンにも分かった。

アレンはすぐ隣に建つお屋敷の方を向きながら言った。

「彼女の祖父がソードマスターの伝承者なのは知っているだろう？」

「あ、はい」

「彼女は幼い頃から、お祖父さんに可愛がられていた」

「・・・えっと、それで？」

「それだけだ」

「・・・そうですか」

女の子にはそれらしい可愛がり方がある気がする。

「なんていうか・・・この町の女の子は、皆さん逞しいですね」

デイジーもそうだし、狩人をしているベティもそうだ。

だが、反論する人が1人いた。

「みんなじゃないけど」

リディアのどこか冷めた声に、レオンは慌てる。

「そ、そうですよね！リディアさんは違いますよ・・・ね？」

言い切る自信がなかったレオンだった。

「一緒だと思う？」

「いえ！そんな・・・」

じつと見つめてくるリディアの視線に、レオンは耐えきれなくなつた。

「そ、そういえば、今日は、リディアさん、スカートですね。素敵だと思います」

「デイジーは大抵スカートだけど」

「で、でも、リディアさんは、珍しいじゃないですか！その、いつもは格好いい感じですけど、今日は一段と可愛らしいっていうか・・・」

自分で言つてて恥ずかしいくらいだった。

言われた本人はもつと恥ずかしかったのだろう。視線を逸らしながら、頬を赤らめているのが分かる。

レオンの左腕を一瞥してから、ぶっきらぼうな口調で言う。

「・・・鎧と盾はもうちょつとかかるから」

その言葉を残し、リディアは足早に去っていった。

残ったのは男2人と短剣3本。

よく分からないけれど、とりあえず、解放されてよかったという
思いでいっぱいだった。

そこで、いつの間にか木に刺さった短剣を回収してきてくれたアレ
ンがぽつりと言う。

「レオンは友人に恵まれているな」

どこか、認めにくい言葉だった。

「・・・そうですね。とりあえず、武器も手に入っだし、使い方を
教えてくれる人も見つかったし」

だけど、後で何かとんでもないしっぺがえしが来そうな気がする
のは何故だろう。

レオンの背後では、無邪気な子供達の歓声が響いていた。

必要不十分

細長い金属棒が穴の中を這いずり回る。

金属が擦れ合う音。

針金から手に伝わってくる振動。

その両者を感じ取りながら、構造を想像する。

傍らに置いてある本に載っている図と比較しながら。

これだろうか。

100年ちよつと前に作られた型。

別のツールを取り出す。

針金を曲げて、形を微調整する。

上を押さえて、下の本体の方へ差し込む。

カチツという、確かな手応え。

「・・・やった」

レオンの口から、達成感と共にその言葉が零れ出たその時だった。
「ちよつ・・・うわっ！」

その声の後に小さな炸裂音がしたかと思うと、レオンの背後で、
積んであった酒瓶が崩れ落ちたかのような、盛大な音が鳴り響いた。
思わず両手で耳を塞いだレオンだが、数秒後、恐る恐る振り返る。
元々散らかっていたガレージ内だったが、今はさらに多くの、よ
りどりみどりの物が床に散らばっている。

その中心にいるのは、黒っぽいショートヘアの、子供にしか見え
ない人物の後ろ姿。レオンと同じ16歳という事だが、どうも臍目
に見ても、12歳くらいにしか見えない。ついでに性別不詳という
謎の人物。今は床に座り込んでいるから、腰に巻いた上着がスカ―
トみたいに見える。だから、なんとなく女の子っぽく見えるが、立
ち上がってこちらを向いたら、ハーフパンツを履いているのがはっ

きりするので、その時点で性別に自信が持てなくなる。見る方向によって印象が変わる、万華鏡みたいな人物である。

そんな人物だが、今はここからでも分かるくらい肩が震えていた。怒っているのか、泣いているのか分からないけれど、いずれにしても不機嫌なのは間違いない。

「その・・・ごめん、ニコル」

レオンが控えめに謝ると、ニコルは大きく溜息をついて、床に寝ころんだ。

逆さまの顔も、目が大きくて子供っぽい。明るい瞳が自然と目を引くが、それほど怒っている様子ではなかったので、レオンはほっとした。

「まあ、いつかぁ・・・元々見込み薄だったんだよね」

息を吐き出すようにそう言った。ニコルは声が少し高い。だけど、男の子だとしても、声変わりしていない場合もあるから、それほど不自然ではない。

邪魔をしてしまった手前、レオンは一応聞いてみる事にする。何か作っている時のニコルは、ちょっとした物音にも敏感なのだ。自分の呟きが邪魔をしたのは明らかである。

「何を作ってたの？」

「うーん・・・一言で言うなら、魔法妨害装置かなあ。ちょっとアイデアがあつて、もしかしたら、魔力に干渉して、魔法を妨害出来るんじゃないかと思ってたんだけど」

「え・・・それって、もしかして凄い事なんじゃ？」

魔法の才能はからつきしなレオンだが、そんな発明品は聞いた事がない。もしかしたら、偉大な発明ではないのか。

「でも、そもそも、魔法を妨害したかったら、術者の前に、閃光弾とか火薬とかシンバルとか、とにかく大きな音とか光を出す物を投げればいいだけだし」

「なかなかシンバルは持つて行かないと思うけど・・・それだって、確実に妨害出来るわけじゃないよね？」

「確実なのは、まあ、攻撃する事だよね。出来たら息の根を止める事」

「でも、それだって、相手に護衛がいたらダメなわけだし」

「まあね。というか、音とか光が効かないモンスターもいるだろうから、結局、確実なのは人間相手の時だけかなあ」

「・・・今気付いたけど、ニコルが想定してるのは、人間同士の戦いなのか？」

「人間はいいんだよ。さっき言ったように、閃光弾とか投げればいいんだから。だけど、モンスター相手には何が効くか分からないから、もし魔力妨害が出来るなら、一番確実でしょ？」

「ああ・・・なるほど」

「それでアイデアを思い付いたから、ちょっと作ってみてたんだ。だけど、やっぱりちよつと難しいな。そもそも、僕には魔力が見えないから、確かめようにも確かめられないし」

レオンは不意に思い付いた提案を試してみる。なるべく悟られないように、自然な感じを心がけた。

「だったら、誰か町の人に頼んでみたら？魔法が使える人がいるはずだし」

その提案にも、ニコルは浮かない顔のままだった。

「あんまり頼みたくないなあ。もしかしたら、魔法が暴発するかもしれないし」

「でも、もし成功したら、凄い事だよね？」

「そうでもないよ。魔力を利用した装置なら、同じ様な物が結構あるから」

「そうなの？そっか・・・」

それ以上の言葉を思い付かなくて、レオンは口を閉ざした。勧誘失敗。

そこで、鈴が転がるような音がする。

音の方を見ると、長い黒毛のカーバンクルが床に散らばった金属の球のような物を転がして遊んでいる。遊んでいるというより

も、その物体の丈夫さを確かめているような、慎重な手つきだった。その妖精が不意にこちらを向く。闇そのものの様な漆黒の中に、アメジストの様な瞳が輝く。

「クロ。おいで」

ニコルが身体を起こしながら呼ぶと、クロはそちらに悠然と歩いて行って、膝に飛び乗った。

頭を撫でているニコルも、撫でられているクロも、同じように目を細める。

その微笑ましい光景にレオンも口元が綻ぶが、心はすっきりとしない。

ここに訪問するのは6度目だが、このガレージに、ニコルとクロ以外がいた事は一度もない。それとなく聞いてみると、ニコルはあつさりと、他には誰も来ていない事を認めた。寝食をする時はさすがに家に帰るらしいが、それ以外はずっとこのガレージで、1人と1匹。たまに、酒場のベティや道具屋のラッセルが訪ねて来る事もあるらしいが、その頻度もかなり少ないらしい。その理由は簡単で、ニコル自身が、研究の邪魔だからと言って追い返すかららしい。

ニコルは自分で周りから距離を取っている。

これはベティの評価である。最初に訪問した時の嘘泣きは、人を追い返す時の常套手段であるらしい。他にもいろいろな手があるらしいが、結局は、わざと相手に嫌われようとしている。その結果が今の環境らしい。ベティは昔のよしみがあるから、ラッセルはたまに資材を運びに行くから、そして、レオンは仕事相手だから話して貰えるらしいが、他の人ではこうはいかないという事だった。

自分でこしらえた孤独。その中にいるニコルは、傍目には寂しうには見えない。

もしかしたら、本当に寂しくないのかもしれないとベティは言っていた。そういう一般的な感性の持ち主ではないらしい。だけど、付き合っただけで浅いレオンには、そう簡単に受け入れられる話ではなかった。

きつと寂しいに違いない。だから、何かのきつかけで外に出て欲しい。

そう思っで、それとなくいろいろ誘っでみているのだが、今のところ、上手くいく気配は全くない。元々レオンは口が上手くない。もつと口が上手いはずのベティだつて試したはずなのだ。それでも上手くいかなかったわけだから、難敵なのは間違いない。

そんなこんなで、訓練が終わつた後に毎日のように訪ねている。その結果、ニコルには変化はないが、レオンの鍵開けの技術はメキメキと上達していた。もちろん、悪いわけではないが、素直に喜べないところである。

「それで、その鍵開けられたんだよね？」

いつの間にか目の前にいたニコルに、レオンは仰け反るほど驚いた。

「近っ！！」

その驚きように、ニコルは頬を掻きながら苦笑する。頭の上にはクロが乗っでいて、薄紫の双眸がなければ、完全に髪の毛と一体化していた。

「レオンも、僕の気配くらいは感じられるようになって欲しいなあ。その調子だと、不意打ちとかで大怪我しそつで心配なんだけど」

確かに、今不意打ちされていたら、大怪我どころではなかったかもしれない。

「そつだよね・・・ごめん」

「まあ、僕で慣れてくれたらいいよ。それで、その鍵は分かつた？」

「あ、うん」

ニコルは腕を組んで、関心したように何度か頷く。だけど、見た目は子供なので、威厳は全くなかつた。

「レオンは勉強熱心だよ。あと、手先もそこそ器用だし」

「そ、そつかな？」

「冒険者よりも、怪盗とかになつてみたら？」

あまりにさりげない口調だつたため、一瞬頷きそつになつた。

「・・・いや、そもそも、そんな職業あるのかな」

「スニークは元々泥棒だったんだよ。悪い奴からしか盗まなかったとかじゃなくて、大金持ちから手当たり次第に盗んでた大泥棒」

レオンは知らなかった。そして、聞いた瞬間に、出来れば知りたくなかったと思った。伝説の冒険者の功績が、少し霞んだような気がした。

「・・・だけど、結局偉大な事をしたから、伝説になったんですよ？」

「さあ・・・僕はその頃の記憶は知らないから」

ニコルは少し首を捻ってそう言った。らしくない、不自然な動作だった。何か前世の記憶で気になる事があるのだろうか。

「それよりも、その鍵が済んだって事は・・・そっか。基本はそんなところだね。あとは応用すれば、大抵の鍵はなんとかなるよ。普通の鍵は、だけどね」

「普通じゃない鍵って？」

「ダミーの鍵とか、特別な加工がしてある高級な鍵とか、魔法の鍵。あとは、錆び付いて開かなくなった鍵とか」

「なるほど」

凄く具体的だった。経験が相当あるのだろう。

「とにかく、あとは経験あるのみ。というわけで、これから毎日、夜な夜な・・・」

レオンはそこで言葉を遮った。

「・・・泥棒の真似事は遠慮します」

ベティ情報によれば、ニコルは練習と称して、町中の家の鍵を開けて回った事があるらしい。

そんなレオンの反応が可笑しかったのか、ニコルは軽く笑いながら言った。

「冗談だよ。僕が集めた鍵があるから、それを持って帰って練習したらいいと思う。あとは、まあ、ダンジョンで余裕があったら、必要な鍵でも開けてみたらいいよ。もちろん、罠がなかったらだけ

ど」

そこでレオンはかねてからの疑問を尋ねてみる事にした。

「あの、前から気になってたんだけど」

「何？」

「こういう鍵開けの技術って、ダンジョンで必要なの？」

冒険者といえば、戦闘のイメージしかなかったレオンである。

ニコルの回答は無関心そのものだった。

「さあ」

「さあって・・・」

「だって、僕、ダンジョンに行った事がないし」

「それはそうだけど」

「とりあえず、ラッセルの店で解錠用のツールが売ってるから、鍵があることはあるんだよね。だけど、例えばドアとか檻とかだったら、壊して通る事も出来るし、魔法で開ける事だって出来るから、

まあ、他のメンバー次第なんじゃないかな」

「他のメンバー・・・」

今のレオンにとって、それは最大の懸念だった。

「もしかして、まだ仲間がいないの？」

ズバリ尋ねられて、レオンは答えに窮した。だが、それで十分答えになっていた。

ニコルは特に表情を変えずに、あっさりと言った。

「だったら、覚えておいた方がいいよね」

「え？」

「だって、レオンは魔法が使えないし、壊して通るほどの力もないし。火薬とか使って吹き飛ばす手もあるけど、水気が多いと使えないし、数に限りがあるわけだから、出来るなら取っておきたいしね」

とても論理的だった。きっと正論である。

だけど、1人でいる事をあまりにあっさりと想定しているから、それが気になった。

クールとかドライとか、そういう風にもとれる。もしかしたら、

これがニコルの強さだと言う人だっているかもしれない。身体は小さいけれど、頭も技術もある。強い敵がいたら隠れる事が出来る。不意をつく事だって出来る。

まるで、1人でいるために培ってきたような能力。

レオンはやっぱり、少し寂しいと思った。ニコルが寂しそうじゃないから、そして、ベティが寂しそうだったから、その両者を知っているレオンは、その対比が余計に寂しい。

でも、これは結局、レオンの印象でしかない。

ニコルの心の中は分らないのだ。ここ数日通い詰めた程度では、分かる方がおかしい。

だが、もし分かったら、何か変えられるかもしれない。

相手を理解する方法がないだろうか。

そこで、レオンは思い出す。つい先日、訓練所でのアレんさんの言葉。

良い手かもしれない。

「ニコル」

突然レオンが表情を明るくしたので、ニコルは訝しんだのかもしれない。少し顔を傾けて聞いた。

「何？」

「僕に何かガジェットを作ってくれない？」

ガジェットというのは、ニコルが作っている怪しげな装置の事だ。それが一般名詞として広く定着している物なのか、それともニコルが勝手にそう呼んでいるのかは知らないが、今はそんな事はどうでもいい。

レオンの言葉を聞いたニコルは、文字通り目を輝かせていた。

「本当！？いいの！？」

言い出したのはレオンの方だが、その喜びように、思わずたじろいだ。

「う、うん・・・」

「うわぁ！嬉しい！本当は、いつ言い出そうかって思ってたくらい

なんだ！だけど、やっぱりこちらからは頼みにくいでしょう？頼みにくいんだ。頼みにくいんだよ、これが」

何故か繰り返されたので、レオンは気圧されて頷く。

「そ、そっか」

「そうなんだよ！だけど、もう、レオンから頼んできたからには、断るのは筋違いってものだよね！もう、任せて！使いやすく、威力がばつちりな奴を用意してみせるから！どうせ、レオン以外は全て敵なわけだしね！木っ端微塵にしてみせるよ！」

自分は木っ端微塵にならないだろうか。それが果てしなく心配だった。

「出来たら、もう少し大人しいのでも・・・」

「そう？あ、そうか。レオンの戦闘スタイルがあるよね。分かっている分かってる。レオンはどうせ、重い鎧は無理でしょ？武器はどうするの？あ、投げナイフだっけ？」

「そ、そうだね。あと、軽めの剣も作ってくれてみたいで」

これはアレンさんと、それからデイジーの提案だった。スロージングダガーだけだと臨機応変さに欠けるというのである。武器訓練の専門家であるアレンさんの意見はもちろん、何故か剣に関して尋常ではない知識があるデイジーのお墨付きまである。それを鍛冶屋のリディアに相談してみたら、あっさり承諾してくれたのだ。

ニコルはレオンの左腕を見る。そこには、バツクラーが取り付けであるままだ。重さに慣れる

為に、普段からつけて歩いている。最初は恥ずかしかったが、すぐに慣れてしまった。

「要は、軽い剣と飛び道具だね。なるほどなるほど。うん。任せて！特に、左手が使えるわけだから、どうにでもなる。うわぁ！・・・楽しみ！絶対凄い奴を用意しておくから、任せてよ。本当に、威力だけは保証するから！」

少し前のレオンの言葉は、綺麗さっぱり忘れられていた。

だけど、本当に嬉しそうなニコルの表情を見ると、何か言う

気が失せてしまった。

ただ、ニコルが作った物を通してなら、作った本人の事が分かるのではないかと思ったただだった。アレんさんが、剣を通して自分の事を知ろうとしてくれたように、話す以外の事で、知ろうとする方法があるような気がした。その為のアプローチのつもりだったのだ。まさかこんなに喜ぶとは思わなかったけれど。

でも、もちろん、悪い気はしない。

ニコルの表情につられるように、レオンの表情も笑顔になる。

ただ、漆黒のカーバンクルだけが、ニコルの頭上で眠そうに大欠伸をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6452y/>

夢色彩のカーバンクル

2011年11月29日21時52分発行